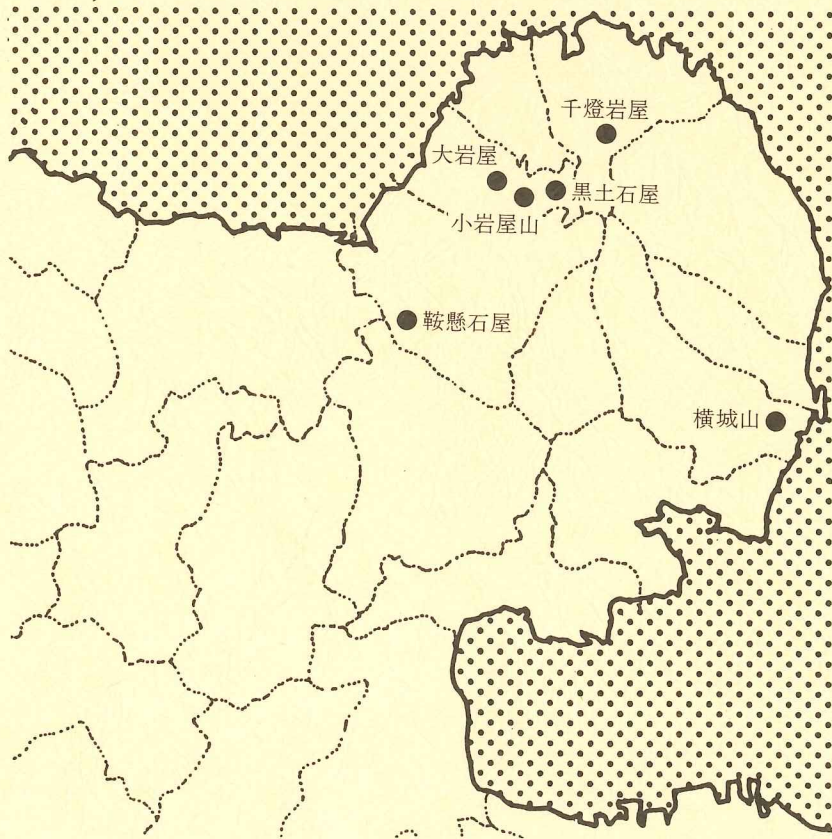


六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ

鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）・黒土石屋（黒土山本松房）・小岩屋山（小岩屋山無動寺）
大岩屋（大岩屋山應曆寺）・千燈岩屋（補陀落山千燈寺）・横城山（横城山東光寺）



1994

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ

鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）・黒土石屋（黒土山本松房）・小岩屋山（小岩屋山無動寺）
大岩屋（大岩屋山應曆寺）・千燈岩屋（補陀落山千燈寺）・横城山（横城山東光寺）

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

序 文

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館では開館以来、「うさ・くにさきの歴史と文化」の解明を研究課題としてきた。その具体的な調査研究事業の一つとして、古代・中世寺院の考古学的な調査や、中世荘園村落の総合的な復原調査がある。これらは、ローカルであって且つグローバルな展開を遂げた宇佐八幡を核として、直接・間接に培われてきた宇佐・国東の歴史と文化の研究に他ならない。

国東六郷山寺院は建武4年(1337)や仁安3年の目録によると、本山・中山・末山の各本寺・末寺合わせて64(65)箇寺から構成されているが、これらは宇佐八幡を起点にして、国東半島の西側に本山、中央山岳部に中山、東側に末山が分布しており、三山組織の構成や展開が示唆されている。

平成4年度から3箇年計画で実施している「六郷山寺院遺構確認調査」は、過疎やさまざまな開発が進行する国東半島にあって、六郷山寺院の遺構の所在や範囲、石造文化財などの確認を行うものである。対象となる寺院は、本山・中山・末山の本寺を中心とした合計約20箇寺である。これ等は考古学的な遺構確認調査であり、国東半島の山岳地域を舞台とした、六郷満山文化の包括的な基礎調査でもある。

今年度の調査は、有住・無住・廃寺を含めて、その元の位置や遺構の所在も不確実な中山本寺を主体とした6箇寺である。その調査成果は本文に詳細な報告があるが、なかでも、昨年の本山の調査成果に引き続いて、六郷山寺院の中山においても経塚が営まれていることが認識できた。このことは、六郷山寺院の成立とその展開に新たな視点を加えるとともに、今後の研究の基礎資料を提供したものだと言える。

六郷山寺院への概括的な基礎調査の実施に関しては、遅きに失した感は否めないが、本調査報告書が今後の六郷満山文化の研究と、文化財への保護・保存に少しでも寄与することができれば幸いである。

最後に、調査を実施するに当たって、ご理解とご協力をいただいた各寺院の関係者をはじめ、地元の教育委員会や調査関係者の皆様方には衷心より感謝申し上げたい。

平成6年3月

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館長

塔 鼻 勝 人

例 言

1. 本書は大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が平成4年度から平成6年度にかけて実施予定の「六郷山寺院遺構確認調査」における平成5年度分の報告書である。
2. 調査は国庫補助を受けて実施しており、平成5年度は六郷山寺院の本山・中山の内、豊後高田市の鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）、真玉町の黒土石屋（黒土山本松房）・小岩屋山（小岩屋山無動寺）・大岩屋（大岩屋山應曆寺）、国見町の千燈岩屋（補陀落山千燈寺）、杵築市の横城山（横城山東光寺）の6箇寺を調査対象とした。
3. 調査にあたり、各寺院に関係する住職・総代の方々をはじめ、地元の関係者や各教育委員会の協力を得た。
4. 聞き取り調査には、真玉町の佐當角雄・野田大二・財前利夫・財前ふじの・井ノ口幸徳・中島浩博・土谷宗利氏、杵築市の矢野直美・田中進氏等をはじめ、多くの方々の協力をえた。
5. 調査にあたり、遺構・遺物の実測、写真撮影は各調査員が実施したが、製図・写真焼き付け等の一部は中須賀真美、七森寛子等の協力による。
6. 本書の執筆は次のとおりである。

第一章 序説	栗田勝弘
第二章 六郷山寺院の調査概要	栗田
第三章 文書からみた六郷山寺院の様相	櫻井成昭
第四章 六郷山寺院の考古学的調査	栗田
I 鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）	〃
II 黒土石屋（黒土山本松房）	〃
III 小岩屋山（小岩屋山無動寺）	〃
IV 大岩屋（大岩屋山應曆寺）	〃
V 千燈岩屋（補陀落山千燈寺）	〃
VI 横城山（横城山東光寺）	〃
第五章 補陀落山千燈寺の法会	段上達雄
第六章 應曆寺と無動寺およびその周辺の仏像	渡辺文雄
第七章 六郷山寺院の調査成果と課題	栗田
7. 本書の編集は栗田が行った。
8. 引用・参考文献は伊藤常足『太宰管内志』、渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成、豊後国史料』の各巻収録のものであることを明記する。

本文目次

第一章 序 説	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査団の構成	1
第二章 六郷山寺院の調査概要	3
第三章 文書からみた六郷山寺院の様相	6
(1) 建武の注文について	6
(2) 六郷山と在地領主	7
第四章 六郷山寺院の考古学的調査	10
I. 鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）	10
(1) 位置と環境	10
(2) 遺構の状態	10
II. 黒土石屋（黒土山本松房）	11
(1) 位置と環境	11
(2) 遺構の状態	12
本 松 堂	12
本松房の手水鉢（石風呂か）	12
古 宮 の 跡	12
III. 小岩屋山（小岩屋山無動寺）	15
(1) 位置と環境	15
(2) 遺構の状態	17
身濯神社（六所権現）の前庭部	18
磨崖種子と磨崖宝塔	21
山王権現ほか	21
人為的な平坦面	21
観 音 堂	22
不 動 屋 敷	22
中 の 坊 跡	22
ボヤシキ	22
ジレンボウ跡	22
寶 泉 坊 跡	23
講 堂 跡	23
ドヤマとオオイシ	23
IV. 大岩屋（大岩屋山應曆寺）	25

(1) 位置と環境	25
(2) 遺構の状態	26
本堂・庫裡・観音堂	26
墓地群	29
六所権現	29
講堂跡	29
堂の迫磨崖仏	29
人為的平坦面	29
山王七社大権現	29
奥ノ院の姥ヶ懐	29
V. 千燈岩屋（補陀落山千燈寺）	33
(1) 位置と環境	33
(2) 遺構の状態	35
現千燈寺	35
千燈石仏	35
西行戻し	35
西ノ坊跡	36
本堂跡（護摩堂）	36
山王堂跡	36
講堂跡	36
地主権現	36
奥ノ院本堂	36
六所権現堂跡	42
仁聞菩薩御廟（仁聞入寂の岩屋）	42
千燈寺墓地石塔群	42
弘法堂跡・仁聞の墓と五輪塔群	42
五輪塔群	44
VI. 横城山（横城山東光寺）	45
(1) 位置と環境	45
(2) 遺構の状態	47
本堂・庫裡	47
護摩堂跡	47
観音屋敷と観音坂	47
薬師堂跡	47
東光寺経塚群	48

楠木屋敷（古屋敷）と墓地	48
日吉社	48
第五章 補陀落山千燈寺の法会	52
(1) 千燈寺の年中行事	52
①千燈寺の年中行事	52
②金剛童子祭り	52
③護符と版木	52
(2) 千燈寺修正鬼会	53
①修正鬼会の準備と差定	53
②修正鬼会の仮面と用具	55
第六章 応曆寺と無動寺およびその周辺の仏像	60
(1) 応曆寺とその周辺の仏像	60
(2) 福真磨崖仏	61
(3) 無動寺とその周辺の仏像	62
(4) 宝泉坊の毘沙門天像	65
第七章 六郷山寺院の調査成果と課題	66
I. 鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）	66
II. 黒土石屋（黒土山本松房）	66
III. 小岩屋山（小岩屋山無動寺）	66
IV. 大岩屋（大岩屋山應曆寺）	67
V. 千燈岩屋（補陀落山千燈寺）	68
VI. 横城山（横城山東光寺）	69

図 版 目 次

第1図 六郷山寺院の主要分布図（『仁安3年六郷二十八山本寺目録』による）	2
第2図 調査対象とした六郷山寺院の位置図	5
第3図 六郷山本中末寺次第第四至等注文案（永弘文書）	6
第4図 別当并院主分田町坪付注文（余瀬文書）	8
第5図 九州探題御教書（都甲文書）	9
第6図 鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）	10

第7図	本松堂の近景	11
第8図	本松房(坊)の手水鉢(石風呂か)	12
第9図	大岩屋(大岩屋山應曆寺)、小岩屋山(小岩屋山無動寺)、 黒土石屋(黒土山本松房)の位置と四至	13
第10図	通称「大石」道と橋の間に巨岩がある	14
第11図	現無動寺近景	15
第12図	現無動寺裏山の1号岩屋	16
第13図	現無動寺裏山の2号岩屋	16
第14図	現無動寺境内の宝篋印塔	16
第15図	下黒土の身濯神社(六所権現)近景	18
第16図	下黒土の身濯神社(六所権現)実測図($\frac{1}{800}$)	19
第17図	身濯神社(六所権現)境内の国東塔と宝篋印塔の一部	20
第18図	身濯神社(六所権現)の神殿と磨崖種子	20
第19図	身濯神社(六所権現)境内の磨崖宝塔	20
第20図	山王権現	21
第21図	身濯神社(六所権現)境内の人為的な平坦面	24
第22図	中の坊にある不動明王の梵字(カーン・マーン)	24
第23図	無動寺の講堂跡	24
第24図	大岩屋山應曆寺の遠景	25
第25図	大岩屋(大岩屋山應曆寺)実測図($\frac{1}{800}$)	27~28
第26図	十一面観音ノ岩屋	30
第27図	應曆寺の葉医門と石造仁王	30
第28図	應曆寺の六所権現	31
第29図	應曆寺の講堂跡	31
第30図	堂の迫磨崖仏	31
第31図	参道の石段と御神木	32
第32図	山王七社大権現の石祠	32
第33図	奥ノ院の姥ヶ懐	32
第34図	千燈岩屋(補陀落山千燈寺)の位置	33
第35図	①は旧千燈寺の遠景、②は五辻岩屋	35
第36図	千燈岩屋(補陀落山千燈寺)実測図	37~38
第37図	千燈石仏	39
第38図	西ノ坊跡	39
第39図	参道	39
第40図	本堂(護摩堂)跡	40

第41図	石 風 呂	40
第42図	講 堂 跡	40
第43図	奥ノ院本堂	41
第44図	来迎磨崖仏	41
第45図	六所権現の岩屋に納められていたという石造宝塔	41
第46図	仁聞入寂の岩屋	43
第47図	弘法堂・仁聞の墓と五輪塔群	43
第48図	仁 聞 の 墓	43
第49図	五 輪 塔 群	44
第50図	横城山（横城山東光寺）の位置と建武4年の四至	45
第51図	横城山東光寺の遠景（矢印が東光寺経塚の位置）	46
第52図	横城山（横城山東光寺）実測図	49～50
第53図	横城山東光寺の本堂	51
第54図	東光寺経塚発掘状態（杵築市教育委員会提供）	51
第55図	4段積上式経筒の出土状態（杵築市教育委員会提供）	51
第56図	荒 鬼 面	57
第57図	災 払 鬼 面	57
第58図	鈴 鬼 男 面	57
第59図	鈴 鬼 女 面	57
第60図	災 払 鬼 面	58
第61図	荒 鬼 面	58
第62図	鬼会式「初夜導師」奥書	59
第63図	槌・斧・午玉宝印	59
第64図	護 符	59
第65図	団扇・鈴	59
第66図	護符版木（右よりウ、イ、エ、オ、カ）	59
第67図	午玉宝印版木	59
第68図	応曆寺不動明王像	60
第69図	堂ノ迫磨崖仏	61
第70図	無動寺薬師如来像	62
第71図	無動寺大日如来像	62
第72図	無動寺伝弥勒仏像	63
第73図	無動寺不動明王像	63
第74図	諸尊図像陀羅尼經	64
第75図	宝泉坊毘沙門天像	64

第一章 序 説

(1) 調査に至る経過

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館では、開館以来「宇佐・国東の歴史と文化」の解明を主要な一つの研究主題として取り組んできた。それは、古代から中世にかけてのローカルで且つグローバルな「宇佐八幡」を通して、発展・展開してきた歴史と文化の解明であった。その具体的な研究としては、宇佐宮弥勒寺・六郷山本山本寺の智恩寺の発掘調査であり、中世の荘園村落の復元を試みた田染荘・都甲荘の総合調査であった。

今回の調査は国東半島を舞台として展開する六郷満山文化の考古学的な総合調査、「六郷山寺院遺構確認調査」である。これは現在、有住・無住・廃寺を問わず、元の所在の判らなくなりつつある山岳寺院跡の往時の位置をまず確認し、寺域や遺構の状態を把握して、これの概略を記録し、伽藍の配置を図化することを目的とした。つまり、六郷山寺院の全体像を掴み、六郷山寺院の複雑な構成や個々の研究目的にアプローチできる基礎資料を提供する作業である。そういう意味で、平成4年度から3箇年にわたって、六郷山寺院の本山・中山・末山の各本寺28箇所、各末寺36(37)箇所、合計64(65)箇所の寺院の内、各本寺を主体とした約20箇所の寺院を調査対象としている。

この調査は六郷山寺院を研究対象としていく場合、不可避的な方法でもあり、もっと早い時期に取り組まねばならなかった調査研究事業の一つでもある。そういう意味で「六郷山寺院遺構確認調査」が終了した時点で、六郷山寺院の本山・中山・末山の実態とその全体像がおぼろげながらも見えてくるはずである。

今年度は六郷山寺院の本山・中山の内、豊後高田市の鞍懸石屋(鞍懸山神宮寺)、真玉町の黒土石屋(黒土山本松房)・小岩屋山(小岩屋山無動寺)・大岩屋(大岩屋山應曆寺)、国見町の千燈岩屋(補陀落山千燈寺)、杵築市の横城山(横城山東光寺)の6箇所を調査対象とした。

(2) 調査団の構成

平成5年度の調査団の構成は次のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会教育長 宮本高志		
調査委員	中野幡能	元別府大学教授	小田富士雄 福岡大学教授
	賀川光夫	別府大学教授	関秀夫 東海大学教授
	後藤宗俊	別府大学教授	千々和 到 国学院大学教授
調査員	塔鼻勝人 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館長		
	田中巳世毅	同	副館長
	甲斐忠彦	同	学芸課長
	真野和夫	同	調査課長

渡 辺 文 雄	同	主幹研究員
山 田 拓 伸	同	主任研究員
段 上 達 雄	同	同
栗 田 勝 弘	同	同
櫻 井 成 昭	同	研 究 員
中須賀 真 美	同	嘱 託
七 森 寛 子	同	同
河 野 典 之	豊後高田市教育委員会社会教育課技師	
平 川 信 哉	杵築市教育委員会社会教育課主事	
飯 沼 賢 司	別府大学助教授	
秋 吉 心 良	大分県教育庁文化課主幹兼文化財係長	
清 水 宗 昭	同	埋蔵文化財第一係長
調査事務 伊 藤 正 行	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	総務課長
河 野 光	同	庶務係長
調査作業員 近 藤 啓 子	・ 長谷川 妙 子 ・ 矢 野 和 子	



第1図 六郷山寺院の主要分布図（『仁安3年六郷二十八山本寺目録』による）

第二章 六郷山寺院の調査概要

周防灘に峭の頭のように突き出た国東半島は、中央に位置する二子山系から放射状の支谷が発達し、国東二十八谷ともよばれる起伏に富む地形を成している。岩肌を露にして屹立する巨岩と溪谷が織りなす自然景観は一種独特な幽玄の世界を醸しだしている。そしてこの国東半島一帯の山々は、宇佐八幡と六郷山寺院に象徴的な神仏混淆と山岳修験の霊場でもある。

狭隘な谷間を俯瞰すると、発達する棚田と草むらの石造物、数えるほどの村落には神社や寺院が目につく。まさにこれは、「仏の里くにさき」に相応しい自然景観であり、中世的世界の村落景観をそのまま残す国東半島野外博物館ともいえる。

六郷満山文化とはこの様な峻厳な山と谷で囲まれた安岐郷・武蔵郷・国東郷・伊美郷・来縄郷・田染郷の国東六郷に由来する呼び方であり、天台の山岳仏教文化を意味している。六郷山という呼び名は養老年間（8世紀初め）に仁聞菩薩によって開かれたという伝承を持つ二十八霊場を総称したものという。『八幡宇佐宮御託宣集』によると仁聞菩薩は八幡大菩薩の応化神であるとも言われている。そういう意味で宇佐八幡と六郷山寺院との深い関係は「宇佐・国東の歴史と文化」を研究するうえで看過しえない興味ある課題である。

六郷山に関する文献では、長承4年（1135）の『夷山住僧行源解文案』が初見である。「六郷御山・本山・満山大衆」などと表記された中に、六郷山の組織的な繋がりを読み取ることが出来る。また、安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』には六郷山の組織が「本山分」15箇所、「中山分」16箇所、「末山分」2箇所に分化されている。その内、六郷山本山の6箇所、中山の13箇所は石屋・岩屋と呼ばれる洞窟を表象とした呼称であり、中世山岳寺院の初期形態のあり方、つまり山岳修験の霊場との深い関係を暗示していると言えよう。

一方、後世の作といわれている仁安3年（1168）の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』には「序分本山八箇寺」、「正宗文〔分か〕中山十箇寺（正しくは9箇寺と1房）」、「流通文〔分か〕末山十箇寺」の28箇所が挙げられている。これ等は全てに「山」号を付す呼称法で統一されている。また、同目録には「本山分末寺」として16箇寺と2房、「中山分末寺」として8箇寺と1房1院（2院と解釈）、「末山分末寺」として8箇寺の計36（37と解釈）箇所が組織されている。つまり、六郷山寺院は総計64（65と解釈）箇所の寺院から成り立っている。

建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』や仁安3年の目録によると、いわゆる本山、中山、末山の分布は宇佐八幡宮を起点にして、半島の西側一帯に本山、中央部の山岳地帯に中山、半島の東側一帯に末山が分布している。

中野幡能氏は六郷山が本山→中山→末山へと順次に造立されていった根拠として、寺領が宇佐宮領→弥勒寺領→国衙領へと進出していった状況を掲げている。そして、これを修験霊山の三山組織と捉え、「本山は学侶の山、中山は修業の山、末山は衆生済度の山」と指摘している。

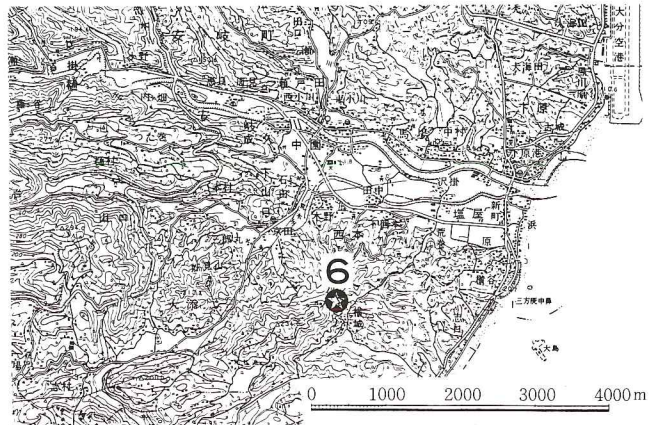
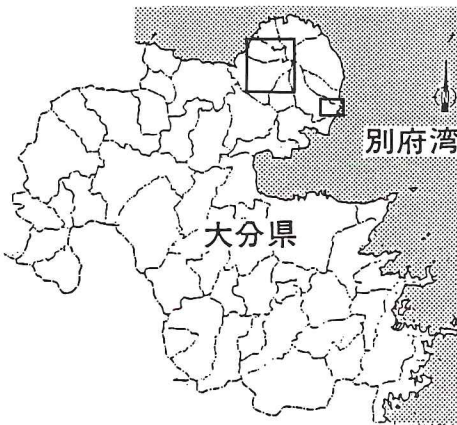
今回の「六郷山寺院遺構確認調査」の対象とした寺院は、安貞2年の目録の「本山分、中山分」の内、「鞍懸石屋・黒土石屋・小岩屋山・大岩屋・千燈岩屋」と弘安7年（1284）の『六郷山異

『國降伏祈禱卷數目録寫』の「横城山」の計6箇所である。これ等は、仁安3年の目録で言い換えると、「序分本山八箇寺」の内の豊後高田市の鞍懸山神宮寺、「正宗文中山十箇寺」の内の真玉町の黒土山本松房、小岩屋山無動寺、大岩屋山應曆寺、国見町の補陀落山千燈寺、杵築市の横城山東光寺に相当する。

現在、これ等の寺院は、小岩屋山無動寺、大岩屋山應曆寺が有住のほかは、旧補陀落山千燈寺、横城山東光寺、鞍懸山神宮寺、黒土山本松房が無住や廃寺となっている。今回の調査の主な目的は、いわゆる本山・中山に所属している6箇寺の創建時の位置をまず確認し、聞き取りや踏査で寺域の範囲や構造を把握して、可能な限りこれを図化していくことであった。しかし、無住や廃寺は勿論として、有住の寺院にしても、本来の位置が移動しており、寺域を把握をする作業は至難であった。実際、鞍懸山神宮寺、黒土山本松房では、往時の寺跡の遺構を確定することは出来なかった。しかし、小岩屋山無動寺、大岩屋山應曆寺、旧補陀落山千燈寺、横城山東光寺では、伽藍の一部の平板実測を実施し、関連資料や有益な情報を得ることができた。そして、真玉町の大岩屋山應曆寺、小岩屋山無動寺、黒土山本松坊では建武4年(1337)の四至が各々明確に把握でき、小岩屋山無動寺の本来の位置が下黒土の身濯神社とその周辺に確定できた。また、それに伴って、黒土石屋が黒土山本松房であれば、本松房の位置も、石屋のある現無動寺の位置から当地へ移動した可能性のあることが推察できた。

今回の調査で特に注目できるのは、『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ』で指摘した六郷山寺院と経塚との関係が「中山」の寺院においても確認できたことである。それは、横城山東光寺と東光寺経塚群との関係であり、旧補陀落山千燈寺における「仁聞の墓」の場所と経塚との関係である。『豊後國志』には後述するように、旧千燈寺の「仁聞の墓」の記述があるが、この記述内容は3本の銅経筒と埋納品の発見の有り様を表現したものとも解釈できそうである。奥ノ院とその周辺に営まれた経塚の発見は、六郷山寺院の起源に関する問題や、その後の宝塔や国東塔の造立や発達との関係で看過しえない。

注 中野幡能著『八幡信仰史の研究 上下巻』 吉川弘文館 昭和50年



第 2 図 調査対象とした六郷山寺院の位置図

- 1. 鞍懸石屋 (鞍懸山神宮寺)、 2. 黒土石屋 (黒土山本松房)、 3. 小岩屋山 (小岩屋山無動寺)
- 4. 大岩屋 (大岩屋山應曆寺)、 5. 千燈岩屋 (補陀落山千燈寺)、 6. 横城山 (横城山東光寺)

第三章 文書からみた六郷山寺院の様相

(1) 建武の注文について

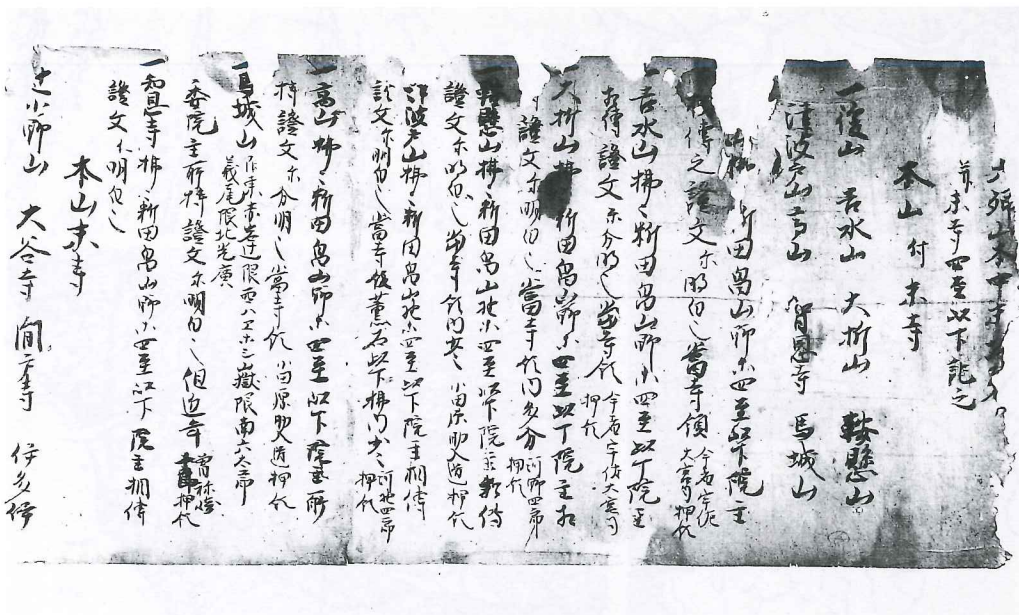
建武4年(1337)6月1日の年紀を持つ「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」(以下、建武の注文とよぶ)は、南北朝期前後の六郷山寺院の全容をすることができる重要な史料である。この他の中世六郷山の全体像に関わる史料は「六郷山諸勤行并堂役祭目録」であったり、「異国降伏祈祷巻数目録」というように、祈祷法会の状況を記したものである。しかし、この建武の注文は、

六郷山本中末次第并末寺四至以下記之

本山付末寺

- 一 後山 吉水山 大折山 鞍懸山 津波戸山 高山 智恩寺 馬城山
 □山 拂□料田山野等四至以下 院主相傳之證文爾明白也 当寺領今者宇佐大宮司押領
 - 一 吉水山 拂□料田山野等四至以丁(下) 院主相傳證文爾分明也 当寺領今者宇佐大宮司押領
 - 一 大折山 拂□料田山野等四至以丁(下) 院主相傳證文爾明白也 当寺領内多分河野四郎押領
- (中略)
- 一 千燈山 限東久保アメ牛淵 限西キノ畑 限南七曲 限北雨乞下岩鼻 委院主所持證文仁明白也
- (後略)

とあるように、本山・中山・末山の各寺院について、押領をうけた寺院については、その旨と押



第3図 六郷山本中末寺次第并四至等注文案(永弘文書)

領した相手を記し、押領された旨が記されていない寺院については、四至が書かれている。ここでは、法会を勤行する六郷山寺院の寺領が主題とされ、各寺の現状を書き留めている。この点が、他の六郷山寺院の全体に触れた諸史料とは異質なところである。この注文以後、六郷山全体を概観できるような史料は、中世を通じてのこされていない⁽¹⁾。これは、南北朝期以降、六郷山全体を把握し、記録を作成しうる組織が機能しなくなったことを示しており、また六郷山全体を視野におさめた記録を作成する機会もなくなっていたのである。

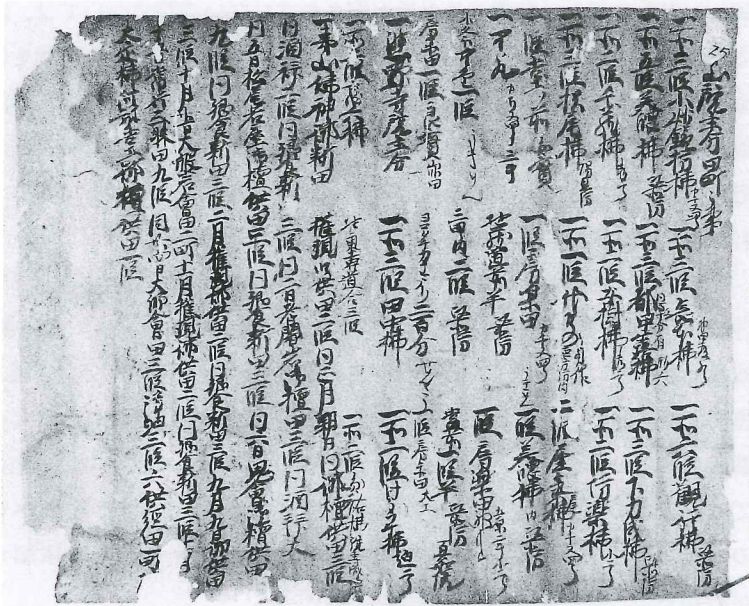
ところで、この注文には、当時の六郷山寺院の在り方を示す記述がいくつかある。例えば、「拂々料田山野等四至以下」とあるように、六郷山領では「払」と称される単位が基本的な土地編成とされていたこと、あるいは注文の最後に「右、依且惣公文之帳、且本末寺之披見院主相傳證文、所記如件」とあり、寺領の四至に限らず、六郷山寺院についての情報が「惣公文」の下に蓄積されていたことなどを知ることができる。また、本山・中山・末山の各々について、はじめて本寺末寺の区別が記されたのもこの注文である。かかる区別がいつ頃から成立していたのかは不明であるが、とにかくこの段階では、本寺－末寺の体制ができあがっていたことがわかる。

(2) 六郷山と在地領主

建武の注文では、寺領が問題とされていたが、六郷山寺院の経済的基盤を具体的に知らせてくれるような史料は数少ない。余瀨文書には年紀不明の「別当并院主分田町坪付注文」という史料がある。それには、「夷山佛神御料田」として、権現御供田二段、鬼會御檀供田九段、大般若會田二町、常行三昧田九段、大師會田三段などが記されている。もちろん、これらは夷山という1個の寺院の法会勤行－宗教活動－のための所領であることはいうまでもない。建武の注文では、夷岩屋の四至は記されておらず、こうした料田が設定された範囲と四至との関係はここでは知ることができない。

また、この史料には別当と院主が有した「田町」も書き上げられている。いわば、これは六郷山寺院を構成する僧侶⁽²⁾の経済的基盤を示しているといってもよい。別当あるいは院主は、こうした所領を「一所一段西前七郎さへもん」という記述にも示されるように、民衆を従属させつつ支配し、そこからの上分を得ていたと考えられる。それ故、大友能直の讓状に横城山東光寺の院主職が諸田名地頭職などと併記され、知行の対象とされたのである。院主職は在地領主などが有したような諸職と本質は異なるものではなかったといえる。

余瀨文書には、別当や院主だけでなく、他の六郷山僧侶の知行に関する史料もいくつかのこされている。そのなかの1つ、嘉暦2年(1327)の「権別当仁王丸下知状案」では権律師長祐に「夷山内蓮祐拂、同計宇良木田樋懸田地領主職」が安堵されている。ここで注意しておきたいのは「領主職」という文言である。長祐は「領主」として把握されており、彼は蓮祐拂や計宇良木田、樋懸田からの上分を得ることができたと考えられる。また、建保3年(1215)の「僧朝範安



第4図
別当并院主分田町坪付
注文
(余瀨文書)

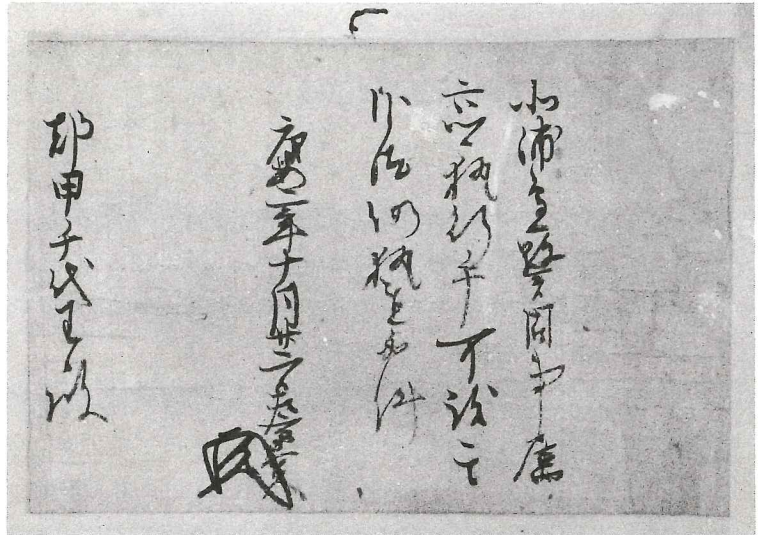
埵申状案」には、安養房から朝範へ譲られた田畠として「一所 ウハ大郎之下作田畠」とあり、安養房が私領として有していた田畠に「下作」する者が存在したことがわかる。とすると、先の長祐の下にもこうした田畠を「下作」する「七郎さへもん」のような者が存在していたことが推測される。そして、こうした僧侶による私領などの支配の条件となるのが、寺院の本来的機能ともいうべき仏神事諸役の勤行であった。

つまり、六郷山寺院はそれに従属する民衆を生み出し、支配を展開させていたわけである。これは、在地領主らによる支配の在り方と本質的には変わることなく、六郷山寺院と在地領主は同じ階級に属するもので、両者の間には階級の差異は見られないといってよい。六郷山寺院は「異国降伏祈禱」あるいは修正月会や観音講・薬師講などを執り行う宗教施設であると同時に、それらの維持のために寺領を支配していく「領主」でもあったのである。

こうした六郷山寺院は、執行-権別当-上座都維那体制の下に統括されていたが、その頂点ともいうべき執行には、鎌倉期には在地領主都甲氏の一族である円仁・円然が任じられている。また、智恩寺の院主は小田原氏の一族が務めたことが知られている。六郷山の僧侶集団には在地領主の一族が含まれており、六郷山の僧侶集団の「再生産」は、こうした在地領主の一族を組み込みつつなされていったといえる。

ところで、康安2年(1362)10月22日付の斯波氏経書下は「北浦邊警固事、屬六郷執行手、可致其沙汰」と都甲千代王に令している。(都甲文書)ここでは、「六郷執行」は警固を担い得る「勢力」として捉えられており、「執行手」に属していた六郷山寺院も執行同様、1つの「勢力」たり得たともいえる。時代は下るが、智恩寺は文禄の朝鮮出兵の際には大友の軍勢の一端を担うものとして、その寺名が記されている。要するに中世の六郷山は、1個の「勢力」として、警固なども行い得る集団であり、単なる信仰集団ではなかったのである。

第5図
斯波氏經書下
(都甲文書)



こうした六郷山寺院は、安貞2年(1228)に関東祈禱所として認められている。この動きは、それまでにつくりあげてきた、自らの支配の保障のために、より上部権力に庇護を求めたものと捉えることができる。その際には「六郷山諸勤行并堂役祭目録」が作成されているが、ここには仁聞菩薩の伝承が織り込まれていることは注目してよい。津波戸岩屋は人間菩薩が「放瑞相」った地であり、五岩屋は「人間菩薩有五人同行、五壇法修行」の地と記されているように、仁聞の伝承が六郷山寺院に即して具体的に語られているのである。かかる伝承は、六郷山が「祈禱所」として認められ、庇護を受けるためには必要とされたものであり、関東祈禱所として認定を受ける過程で、改めて整備され直したと考えられるのである。

以上では、六郷山寺院が在地社会の中に存在した宗教勢力であったことを述べてきた。これは自明のことかもしれないが、六郷山という社会的勢力を捉えていく上で、留意すべき点であると思われる。

- 註(1) 「仁安三年六郷二十八山本寺目録」は、近世の作とされている。(『大分県史』中世2) ここでも、この見解に従いたい。
- (2) 六郷山寺院を構成する者は、「大衆」「衆徒」「供僧」などと種々の表現がなされているが、とりあえずここでは「僧侶」とした。

第四章 六郷山寺院の考古学的調査

I. 鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）

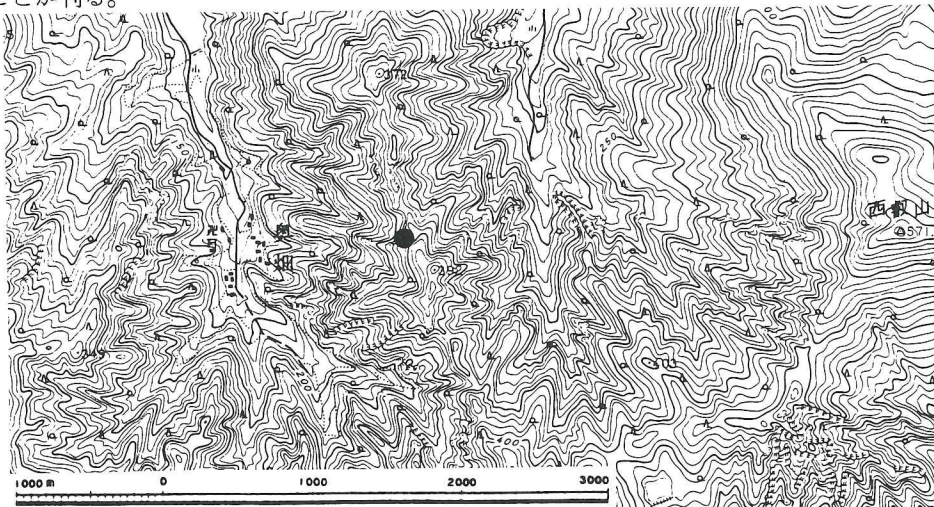
(1) 位置と環境

鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）の所在地は豊後高田市大字奥畑と言われているがその位置は不明である。（第6図）奥畑には鞍懸山城の跡があり、「城の谷」という小谷の川で、鞍懸山城の姫が水を酌んだという伝説が残っているのみである。鞍懸山神宮寺に関する文献資料を時代ごとにみると、以下ようになる。

- 1 安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』に「本山分一鞍懸石屋、於権現御寶前、二季御祭 五節供等」とある。
- 2 嘉元2年（1304）の『六郷屋山例講谷役配分注文』に「鞍懸」
- 3 建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次並四至等注文』に「一鞍懸山・・・小田原助入道押領」。
- 4 後世の作といわれる仁安3年（1168）の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』に「序分本山八箇寺 鞍懸山神宮寺」。
- 5 『太宰管内志』には「鞍懸山は□脚（郷）□村にあり今は絶て傳はらず」とあり、『太宰管内志』の『天明年中六郷山寺院名簿』には「神宮寺在糸永村・・・大友家ノ老臣田原親貫鞍懸ノ城にたてこもる（隠徳太平記六十三巻）」とある。

(2) 遺構の状態

鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）に関する主な記録は以上であるが神宮寺に関する遺構は発見できなかった。安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』には鞍懸石屋とともに権現があったことが判る。



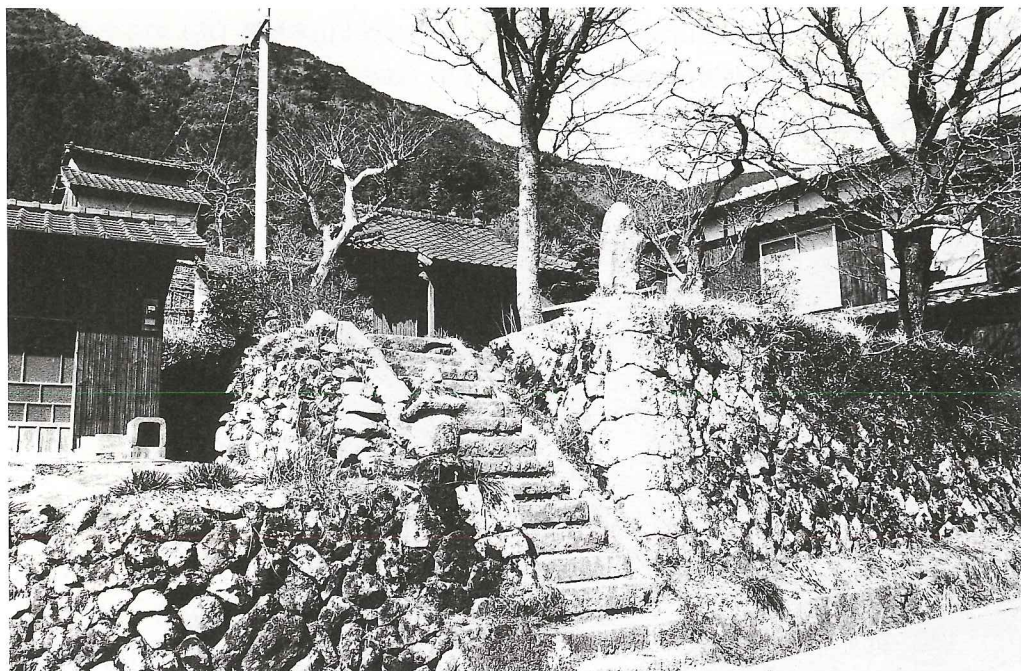
第6図 鞍懸石屋（鞍懸山神宮寺）

Ⅱ. 黒土石屋（黒土山本松房）

（1）位置と環境

本松房（坊）の跡と伝えられている場所は真玉町大字黒土の上黒土にある。ここはかつての、上黒土字本松にあたるが、遺構の位置は明確ではない。黒土石屋（黒土山本松房）を記録の上で辿ると次のように整理できる。

- 1 長承4年（1135）の『夷住僧行源解状案』に「黒土石屋」。
- 2 安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』に「中山分一黒土石屋、本尊馬頭観音、・・・六所権現於御寶前、二季祭 五節供等、今始御祈禱・・・」とある。
- 3 嘉元2年（1304）の『六郷屋山例講谷役配分注文』に「黒土」。
- 4 建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』に「中山一黒土限東美尾 限西大岩屋美尾 限南小岩屋堺 限北大河内夷堺・・・」。
- 5 『太宰管内志』に収録された、室町時代といわれる『六郷山定額院主目録』に「小岩屋山無動寺、院主本松院・・・」
- 6 後世の作といわれる仁安3年（1168）の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』に「正宗文（分）中山十箇寺 黒土山本松房」
- 7 『太宰管内志』の国人伝には、「本松院は真玉庄黒土村にありて今は小庵となれりといふ」とある。
- 8 『豊後國志』に「多門寺 在真玉莊黒土村、號黒土山」



第7図 本松堂の近景

(2) 遺構の状態

黒土石屋（黒土山本松房）に関する資料として、本松坊の手水鉢（石風呂か）と本松堂の石塔類や墓地があり、真玉川を越えた南東部には「寺川内・寺屋敷」などの地名が残っている場所がある。

本松堂（第7図）

本松坊の一角には本松堂と呼ばれているお堂があり、不動明王像や地藏像、弘法像などが祀られている。お堂の敷地内には五輪塔や墓地などがある。『真玉町誌』によると元禄6年（1693）から文化8年（1811）までの住僧の墓塔があるという。墓地には文化8年（1811）の権律師圓空大徳などの墓碑がある。圓空は中黒土の現無動寺墓地に宝暦2年（1752）の墓碑が残っている。

本松坊の手水鉢（石風呂か）（第8図）

本松坊跡の根拠とされている手水鉢（石風呂か）は畑の岸に横たわっている。長径140cm、短径110cmの楕円形を呈し、厚さは約60cmほどである。内法は長径103cm、短径75cmである。

古宮の跡

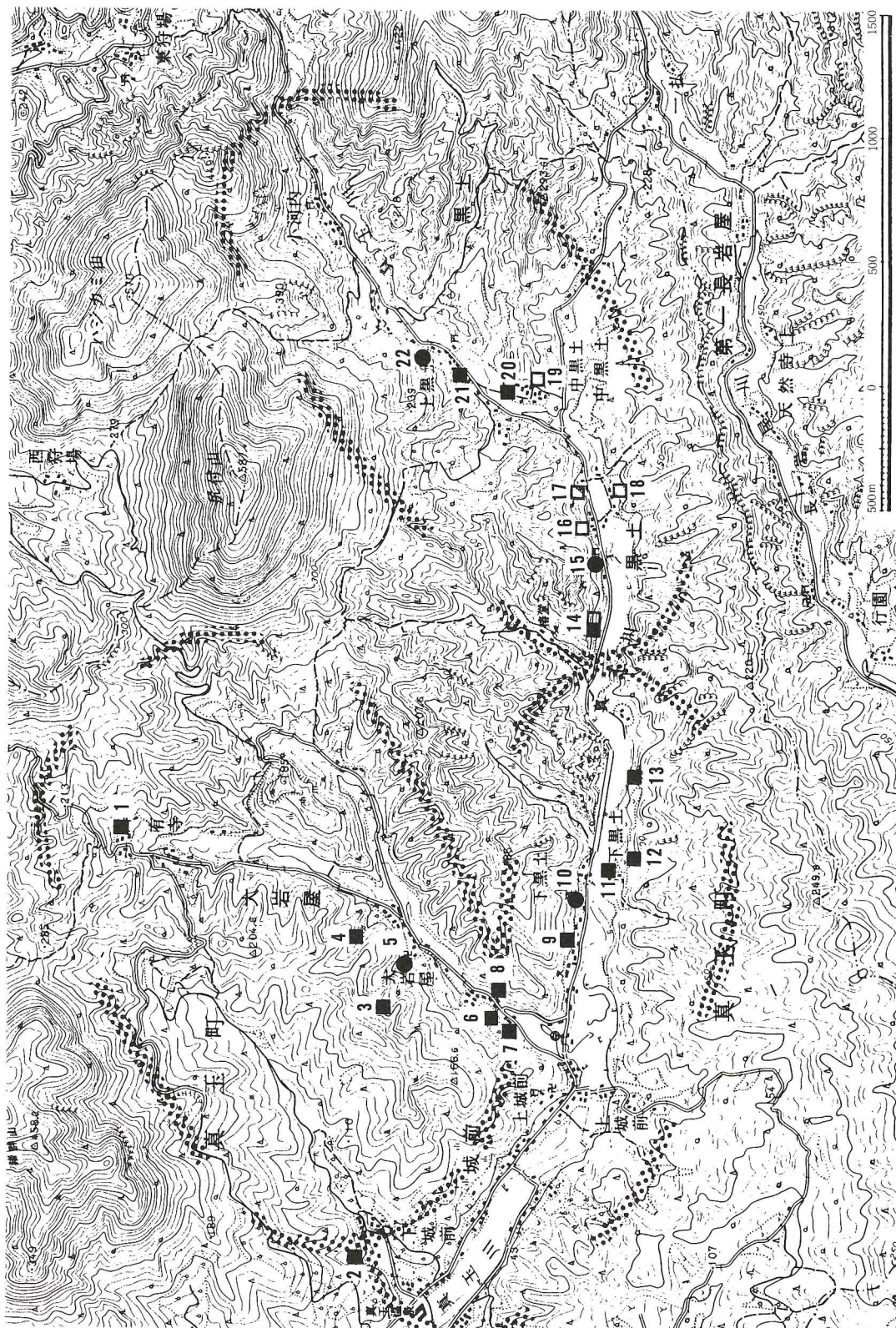
本松坊と呼ばれている段丘の一角には古宮といわれている畑がある。現在、真玉川の傍に身濯神社（六所権現）が下っているが、元々はこの畑に祀られていたものという。本松坊とこれの鎮守の六所権現社であろう。

ところで、安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』の段階では、「中山分一黒土石屋、本尊馬頭観音、・・・六所権現於御賓前・・・」とあり、その他の六郷山寺院のあり方と何も変わるところはない。しかし、『仁安三年六郷二十八山本寺目録』では、本寺・末寺の64（65）箇寺のうち、59箇寺が寺名であり、房名の付くものは4箇寺、院名の付くものは1（2）箇寺にすぎない。そのうち、〇〇山〇〇房と山号の付くものは黒土山本松房（坊）のみである。

長承4年（1135）の『夷住僧行源解状案』や安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』の「黒土石屋」が黒土山本松房（坊）であるとすると、本松房（坊）に想定できる周辺に「石屋」が実際に存在していなければならない。なぜならば、安貞2年（1228）の段階での六郷



第8図
本松房（坊）の手洗鉢
（石風呂か）



第9図 大岩屋（大岩屋山應暦寺）、小岩屋山（小岩屋山無動寺）、黒土石屋（黒土山本松房）の位置と四至

1. 多宝院 2. 唐溪山弥勒寺 3. 妙見岩屋 4. エザリ坊 5. 大岩屋（大岩屋山應暦寺） 6. 坊畑 7. 十一面観音岩屋 8. 不動堂 9. 中の坊 10. 旧無動寺（身漕神社）
 11. ボヤシキ（坊屋敷） 12. シレンボウ（慈蓮坊、地連坊） 13. 福真磨崖仏（四王権現岩屋） 14. 講堂跡・仏性坊 15. 現無動寺 16. アゼツ坊（庵実坊） 17. 善蔵坊
 18. 慈蓮坊 19. 仏仙坊・法泉坊 20. 寶泉坊 21. 本松堂 22. 本松坊
- （スクリーントーン内は建武4年の四至を示す。今回の調査で確認がとれなかった坊跡は白四角で示す。）

山寺院の場合は「石屋・岩屋・山・寺・社」などがつくが、管見によると、「石屋・岩屋」と呼ばれたものには、全て洞窟や岩陰を伴っている事実があり、「山・寺・社」と付くものは洞窟や岩陰が伴わない立地環境にある寺である。

しかし、現在、本松房（坊）の跡とされる場所やその周辺には洞窟や岩陰を発見することは出来ない。つまり、黒土石屋（黒土山本松房）の位置は、洞窟や岩陰を伴う元の位置から当地へ移動してきた可能性が高いのである。

では、元の位置とはどこであろうか。両者の関係を次の1～5のようにまとめることができる。

1. 建武4年（1337）の本松房（坊）の四至（第9図）には「限南小岩屋堺」とある。この地点は小岩屋山の四至の「限北大石」に相当している。この通称「大石」（第10図）は、現無動寺より400mも下流にあり、現無動寺の位置は本松房（坊）の四至内にある。
2. 『太宰管内志』に収録されている『六郷山定額院主目録』に「小岩屋山無動寺、院主本松院」とある。
3. 安貞2年の黒土石屋、つまり黒土山本松房（坊）の本尊が馬頭観音であり、『太宰管内志』の国人伝によると、無動寺の観音堂の本尊も馬頭観音である。
4. 現無動寺墓地には宝暦2年（1752）、本松房（坊）墓地には文化8年（1811）の圓空の墓碑がある。
5. 洞窟や岩陰の有無を考慮した場合、二つの岩屋を背景とした現在の無動寺の位置がかつての黒土石屋（黒土山本松房）の位置であった可能性が高い。



第10図 通称「大石」
道と橋の間に巨岩が
ある

Ⅲ. 小岩屋山（小岩屋山無動寺）

（１）位置と環境

現在、小岩屋山無動寺は真玉町大字黒土1475番地（中黒土）に所在する。明治23年の『県政資料寺院明細牒』によると、養老年間に鷹栖法蓮大和尚の開基と伝え、大友氏の滅亡後、叡山無動寺より下向した、圓舜大和尚が中興開基したと記されている。

現在の小岩屋山無動寺（第11図）には、本堂・庫裡、観音堂、身濯神社（六所権現）、奥ノ院（第12・13図）、墓地群があり、境内には鎌倉末～南北朝期の宝篋印塔（第14図）があるが、この境内は後世になって作られたものという。現無動寺の墓地は、中興開基一世にあたる圓舜大和尚の元禄8年（1695）の墓碑が最も古く、それ以降の住職の墓碑が現代に至るまで並んでいる。このことから推測して、現無動寺が中黒土に中興されたのは17世紀中頃～後半頃であろうか。

本来の小岩屋山（小岩屋山無動寺）は、現無動寺より約1500m下流の下黒土の通称小岩屋と呼ばれている、身濯神社とその周辺にあったと言われている。

小岩屋山（小岩屋山無動寺）の遺構に関する部分を記録で辿ると次のようになる。

- 1 長承4年（1135）の『夷住僧行源解状案』に「小石屋」。
- 2 安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』に「中山分一小岩屋山、本尊薬師如来、・・・六所権現於御寶前、二季祭 五節供等、今始御祈祷・・・」
- 3 弘安7年（1284）の『六郷山異國降伏祈祷卷數目録寫』には「中山分 小岩屋」



第11図 現無動寺近景



第12図
現無動寺裏山の1号岩屋



第13図
現無動寺裏山の2号岩屋



第14図
現無動寺境内の宝篋印塔

- 4 嘉元2年(1304)の『六郷屋山例講谷役配分注文』に「小石屋山」
- 5 建武4年(1337)の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』に「中山一小岩屋 限東美尾 限西堂山美尾 限南西佛 限北大石・・・」。
- 6 『太宰管内志』に収録された、室町時代といわれる『六郷山定額院主目録』に「小岩屋山 無動寺、院主本松院、徒呂十二房也」
- 7 天文18年(1549)の『六郷山異國降伏祈禱卷數并山々勤行次第目録寫』に「小岩屋・・・」
- 8 後世の作といわれる仁安3年の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』に「正宗文(分)中山 十箇寺 小岩屋山無動寺」
- 9 安永5年(1776)の寺院名簿によると、支配末寺は赤松山寿福寺とある。
- 10 『太宰管内志』に収録された『天明年中(1781~1788)六郷山寺院名簿』には「黒土村小岩屋山無動寺ハ島原領山門末、一本堂一堂社三字一講堂・・・」とあり、『太宰管内志』の国人伝には「真玉庄下黒土村にあり、天台宗にして入五間横十二間の堂あり南向にして本尊は不動明王・・・左ノ方高處に観音堂あり入一間横一間半本尊は馬頭観音なり講堂は十餘町下流にありて入三間横四間南向なり本尊は薬師如来傍佛は弥勒観音・・・」
- 11 『豊後國志』に「無動寺 在真玉莊黒土村、號小岩山」
- 12 昭和53年の『真玉町誌』には、『應曆寺什器明細帳』による無動寺の坊として、善蔵坊、地連坊、妙光坊、阿実坊、東之坊、中之坊、□宝坊、□蓮坊の8つの坊名が記載され、古老の話として善蔵坊、慈連坊、アゼツ坊、仏仙坊、法泉坊、上の坊、下の坊、不動坊、仏性坊などの9つが聞き取りされている。
- 13 昭和51年の『六郷満山関係文化財総合調査概要』には、善蔵坊、慈連坊、アゼツ坊(庵実坊)、仏仙坊、仏性坊、中之坊などの6つの位置が確認されている。

(2) 遺構の状態

今回の調査は、本来の小岩屋山(小岩屋山無動寺)が下黒土の身濯神社の一带(第15図)にあったと想定した。その根拠としては、下記する幾つかの傍証がある。

1. 小岩屋山(小岩屋山無動寺)の小岩屋という通称名は、下黒土の範囲と重なり、身濯神社とその周辺部が中心である。現無動寺は中黒土に位置している。
2. 建武4年(1337)の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』の四至に「限東美尾 限西堂山美尾 限南西佛 限北大石」とある。「限北大石」は本松坊との境である。通称「大石」という地名の元と推察できる巨岩が、現無動寺より400mも下流にあり、現無動寺は四至の外になる。
3. 現無動寺は下黒土の身濯神社(六所権現)付近から移ったという伝承があり、現無動寺の身濯神社(六所権現)は下黒土の身濯神社(六所権現)から分社されたものであるという。
4. 現無動寺の本尊は不動明王であるが、不動明王は下黒土の中ノ坊から小岩屋の不動屋敷を

経て移されたものという。中ノ坊には不動を示すカーン・マーンの梵字が刻まれた岩がある。以上である。いずれも確証に乏しいが、下黒土の身濯神社（六所権現）とその周辺を旧無動寺と推察してここを実測調査の対象とした。遺構の状態を瞥見してみる。

身濯神社（六所権現）の前庭部（第16図）

身濯神社（六所権現）は真玉町大字黒土の下黒土に所在し、県道赤根線沿いの真玉川右岸の段丘上に位置している。境内は石垣や塀で囲まれ、三つの段を形成している。一段目は約800㎡の平坦面であり、その片隅には下黒土公民館が建っている。参道には、昭和5年の鳥居、大正9年の灯籠などがある。

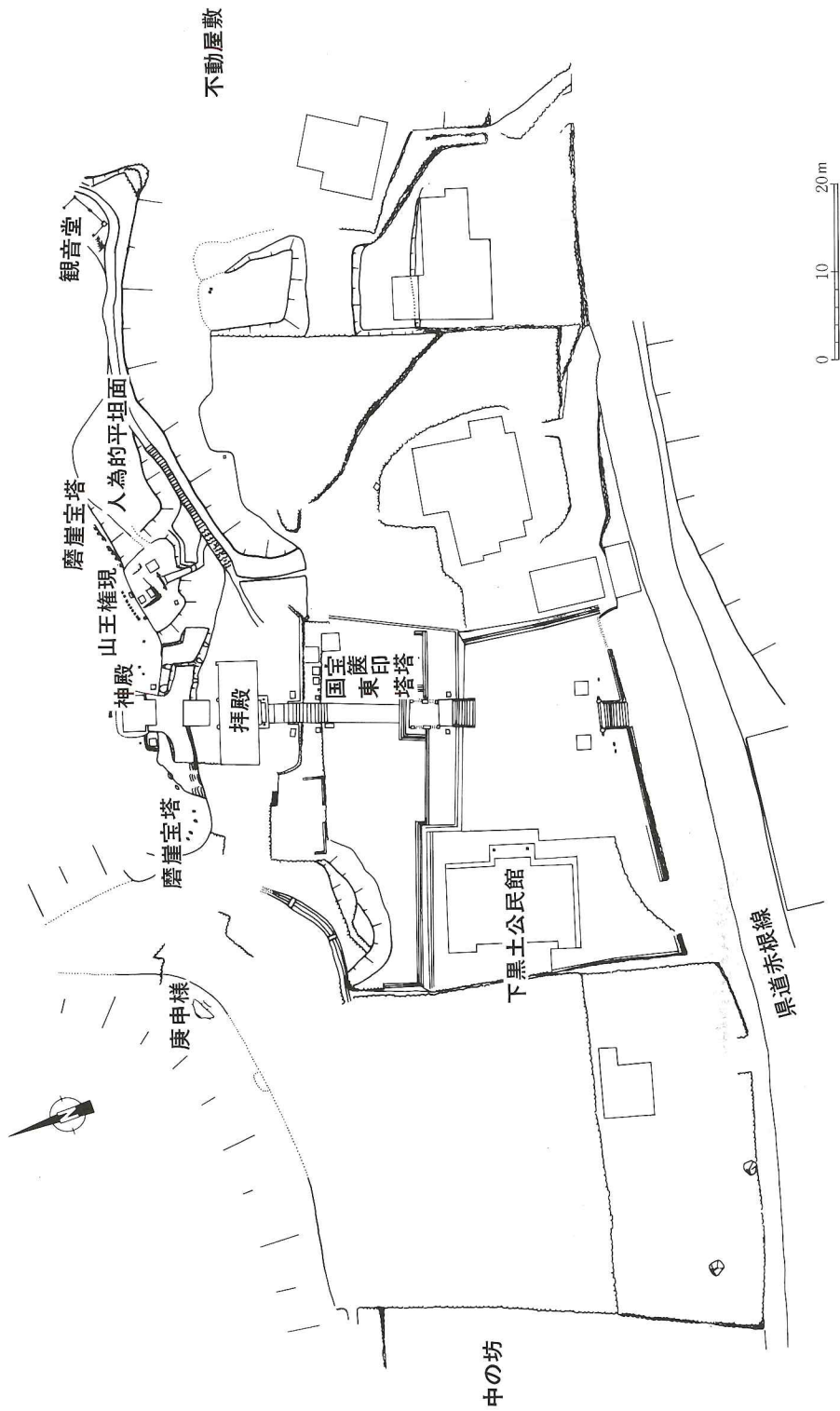
二段目は250㎡の平坦面であり、正徳2年（1712）の灯籠や、その一角には、鎌倉～南北朝期の国東塔の一部分や塔身を欠損した宝篋印塔が残存している。（第17図）

三段目は約200㎡の平坦面であり、岩陰や洞窟には身濯神社（六所権現）の神殿と申殿、拝殿がある。中央の神殿に向かって左側は、庭園風の太鼓橋の架かった場所があり、岩壁の龕には庚申様が祀られている。また、銘の入った石造品としては、明和4年（1767）の石灯籠、元治2年（1865）の狛犬、身濯神社（六所権現）本殿の左右に遷社された、天保10年（1839）の八大龍神宮、明治廿年の豊前今井津神社がある。

現在の身濯神社の神殿は、人為的に彫り込んだ洞窟内に鎮座しており、その入り口の岩肌には、「弘化二年（1845） 奉岩屋切廣 己二月吉日 十二神同さいしき□□ □主 藤原藤三良」と刻まれている。岩屋の中央を幅4.88m、奥に3.05m掘り窪めている。現在、身濯神社（六所権現）



第15図 下黒土の身濯神社（六所権現）近景



第16図 下黒土の身濯神社（六所権現）実測図 $\left(\frac{1}{800}\right)$



第17図
身濯神社（六所権現）
境内の国東塔と宝篋印
塔の一部



第18図
身濯神社（六所権現）の
神殿と磨崖種子



第19図
身濯神社（六所権現）
境内の磨崖宝塔



第20図
山王権現

を祀っているが、弘化2年には十二神将が祀られていたことが判る。

なお、神殿と申殿との間の岩盤の、やや高い西と東の隅を「L」の字状に削って、講堂の様な建物を配置した跡を示す加工がある。東・西の長さは11mであるが、北・南の長さは不明である。

磨崖種子と磨崖宝塔（第16・18・19図）

岩屋中央部に向かって右前面の岩壁には、直径が約130cmの円形文の中に阿弥陀の種子のキリクが線彫りされている。鎌倉時代～南北朝期のものであろう。

また、岩屋中央部に向かって左右の岩壁には磨崖宝塔が浮き彫りされ、宝塔の塔身横には長方形の納入孔が穿かれている。向かって左側の岩壁には現在4基が確認できるが、風雨による浸食が著しく痕跡を留める程度のももある。宝塔の納入孔は全て左横に掘られている。一方、向かって右側の岩壁には、現在7基が確認できる。宝塔は横225cm、縦108cm、奥行き25cmの龕の中に3基が納まっており、やや下がった位置の、横215cm、縦115cm、奥行き25cmの龕の中にも3基、更に少し下がった位置に1基の宝塔が確認できる。これらの納入孔は縦20cm前後、横10cm前後、奥行き15cm前後の長方形を呈し、全て右横に掘られている。磨崖宝塔の納入孔の位置が、左・右の面を対象になっており、中央を意識している様子である。

山王権現ほか（第16・20図）

岩屋に向かって右側の石段を数段登ると、やや高所の平坦地になっていて山王権現が祀られている。寛政10年（1799）や文化5年（1808）の鳥居や石祠があり「奉寄進山王宮」とある。また、水神様の石祠や、岩壁には宝暦12年（1762）の「奉再興大神宮」の石祠もある。

人為的な平坦面（第16・21図）

石段を登り詰めると、左側に面積約80㎡の平坦な狭い空間がある。人為的な平坦面であり、何かのお堂か、社でも祀られていた様相を呈している。上述したように、現在の身濯神社（六所権現）の神殿が、弘化2年に掘り広げられ、十二神将が祀られていたことは事実である。そうすれ

ば、それまでの十二神将を安置していた薬師堂がどこかに必要であるし、安貞2年(1228)以降の六所権現社もどこかに祀られていたはずである。つまり、この平坦面は薬師堂か六所権現社のどちらかが祀られるに最も相応しい場所と考えてよい。無動寺の本尊が元々薬師如来であることから推測して、岩屋に薬師と十二神将が祀られ、この平坦面は六所権現社が祀られていた可能性が高い。

観音堂(第16図)

人為的な平坦面の右横は岩壁が張り出しており、その先端のやや高所に龕を穿って、数体の石造品が安置されている。千手観音像2軀、十一面観音像、弘法像2軀、菩薩像などである。昭和5年には無動寺住職らによって「観音堂一字」が懸崖造り風に建てられている。

不動屋敷(第16図)

身濯神社境内より外れた東側、観音堂の南東部には不動屋敷とよばれている所がある。不動屋敷には次のような伝承がある。「中の坊の不動様を現無動寺へ移す途中、この場所で担いでいた棒が折れた。不動様はどうしてもここから動こうとはしなかったのでここに祀った」という。

中の坊跡(第16図)

身濯神社境内より外れた西側一帯は「中の坊」と呼ばれている。『真玉町誌』によると、應暦寺所蔵の『應暦寺什器明細帳』に、無動寺の坊名として、「中之坊、善蔵坊、地連坊、妙光坊、阿実坊、東之坊、□宝坊、□蓮坊」の8つの坊名が記載されており、「中の坊」の位置が比定できる。

中の坊には中の坊磨崖仏や磨崖板碑群があり、巖乃院明王堂と名付けられているお堂の岩面には不動明王の梵字のカーン・マーンが薬研ぼりされている。(第22図)

ボヤシキ

身濯神社の南東部、真玉川を越えた所に「ボヤシキ」と呼ばれている財前一孝氏の屋敷がある。坊屋敷であろう。

ジレンボウ跡

下黒土の身濯神社の南東部、真玉川と支流の影平川に挟まれた河岸段丘上には「ジレンボウ・ジューレンボウ」跡がある。昭和51年の『六郷満山関係文化財総合調査概要』には無動寺の坊として、「中之坊、仏性坊、アゼツ坊(庵実坊)、慈連坊、善蔵坊、仏仙坊」の6つの位置が確認されている。また、昭和53年の『真玉町誌』には、『應暦寺什器明細帳』による無動寺の坊名として、「中之坊、阿実坊、地連坊、善蔵坊、妙光坊、東之坊、□宝坊、□蓮坊」の8つが記載され、古老(故富山吉夫氏)の話として「仏性坊、アゼツ坊、慈連坊、善蔵坊、仏仙坊、法泉坊、上の坊、下の坊、不動坊」などの9つがあげられている。この「慈連坊、地連坊」の位置がジレン坊跡である。

しかし、『六郷満山関係文化財総合調査概要』には慈連坊の位置が中黒土の現無動寺の南東部になっている。聞き取り操作の単純な誤解か、無動寺の移転に伴ってジレン坊跡が二つになったのかは判らない。

なお、『真玉町誌』の『應暦寺什器明細帳』の□蓮坊は橘地区付近のカクレンボウに相当しそうである。

寶泉坊跡

中黒土の佐古には、地元でフーセン坊、ホーセン坊と呼ばれている所がある。真玉川のすぐ横であり、立地条件はよくない。「寶泉坊」は『真玉町誌』で故富山吉夫氏の話とした「法泉坊」であろう。川よりかなり高い平坦地の佐古地区には10軒前後の民家があり、清正公様を祀っているというお堂がある。この堂には近世の石造品に混在して、平安時代の終わり頃の木造の毘沙門天像が安置されている。

昭和51年の『六郷満山関係文化財総合調査概要』には「法泉坊」の記述はなく、このお堂の周辺を「仏仙坊」とし、昭和56年の元興寺文化財研究所の『国東仏教民俗文化財緊急調査報告書』にはこのお堂を「法泉坊」と捉えている。

講堂跡(第23図)

無動寺の講堂跡と呼ばれている位置は、現無動寺より約400 m西側の通称「大石」と呼ばれている所にあったという。そこは岩陰と狭い前庭があり、小さなお堂が建っていたという。現無動寺所蔵の仏像等はこの講堂に一次保管され、その後、末寺にあたる内迫御堂の現椿堂に昭和45年まで保管されていたものである。講堂跡という呼称がいつ頃のものか判断できないが、下記するように、建武4年(1337)の四至に「限北大石」とあることから、これ以降の時期に当たるものであることは間違いない。

なお、昭和51年の『六郷満山関係文化財総合調査概要』にはこの位置を「仏性坊」としているが、今回の聞き取りでは「講堂の跡」としか確認できていない。

ドヤマとオオイシ

建武4年(1337)の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』の無動寺の四至は「限東美尾 限西堂山美尾 限南西拂 限北大石」とある。

『国語大辞典』によると、「美尾」は御尾と同意と考えられ、「み」は地形名に付く接頭語であり、山や坂などの裾の長くのびた所をさす。今回の聞き取りで、下黒土の中の坊から身濯神社にかけての北側の山を地元では「ドヤマ」と呼んでいる。これは四至の「堂山美尾」の堂山に相当すると見なしてよい。「西拂」は唐溪山弥勒寺の周辺の小字であり、小さな河川を西拂川と呼んでいる。「オオイシ」は現無動寺より400 mも下流にある巨岩とその周辺を通称「大石」と呼んでいる。

以上で無動寺の四至が明確に比定できた。しかし、四至の北の方角は、実際には略東を指していることが判る。ちなみに、真玉町の現地地形図をみると、活字の向きは、海を左手に置き、北東を上にして印刷しており、建武4年(1337)の『四至』の向きと基本的には同じである。これは、海を左手に置き、河川に沿った可耕地を中心に眺めた結果を象徴している。興味深い共通点である。



第21図
身濯神社（六所権現）
境内の人為的な平坦面



第22図
中の坊にある不動明
王の梵字（カン・マーン）



第23図
無動寺の講堂跡

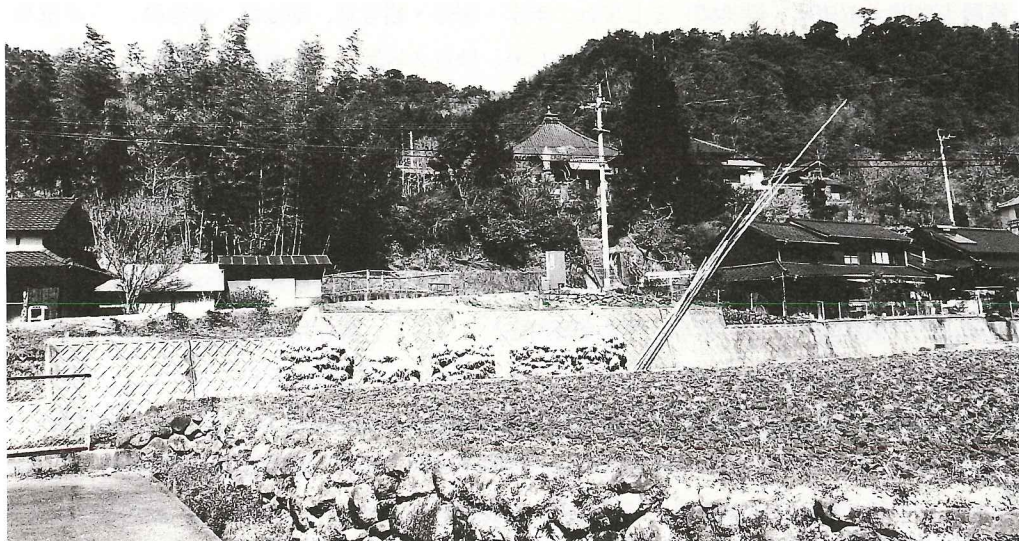
IV. 大岩屋（大岩屋山應曆寺）

（1）位置と環境

大岩屋（大岩屋山應曆寺）は真玉町大字大岩屋401番地に所在し（第24図）、本尊は千手観世音菩薩である。六郷山中山本寺の古刹であり、養老2年（718）に仁聞菩薩の開基と伝えられている。『太宰管内志』によると、應曆寺の旧地は現在地よりも、約300mほど南方にあったといわれ、その川端にある不動は古の講堂の本尊であるという。今回の調査では旧地を確認できなかったが、その周辺には、堂の前庚申石や不動堂などの地名がある。

大岩屋山應曆寺の遺構に関する記録を辿ると次のようになる。

- 1 長承4年（1135）の『夷住僧行源解状案』に「大石屋」。
- 2 安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』に「中山分一大岩屋、本尊千手観音、・・・六所権現於御寶前、二季祭 五節等、今始御祈祷・・・」
- 3 嘉元2年（1304）の『六郷屋山例講谷役配分注文』に「大岩屋」
- 4 建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』に「中山一大岩屋 限東美尾 限西宇寺西美尾 限南西佛（小岩屋山） 限北山尾立・・・」。
- 5 『太宰管内志』に収録された、室町時代といわれる『六郷山定額院主目録』に「大岩屋山、院主金剛院ノ徒、廿五ヶ所、寺有多寶院云々」
- 6 後世の作といわれる仁安3年の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』に「正宗文（分）中山



第24図 大岩屋山應曆寺の遠景

十箇寺大岩屋山應曆寺」

- 7 『真玉町誌』によると、元禄14年（1701）の應曆寺古文書に、院主西之坊、下西坊、上之坊、下之坊、夢中坊、中覚坊、円寿坊の記載がある。また、この他に、四所権現岩屋、観音御堂、妙見岩屋、十一面岩屋、不動御堂、山神五ヶ所、多宝社などが記録されている。
- 8 安永5年（1776）の『六郷満山寺社名簿』には「延岡領、青蓮院末 一鎮守四所権現岩屋 一千手観音堂、一妙見岩屋、一十一面観音岩屋、一不動堂、一山神、一院主西之坊云々、末寺弥勒寺、一鎮守二社権現岩屋 支配多宝院云々」
- 9 『太宰管内志』に収録された『天明年中（1781～1788）六郷山寺院名簿』には國崎郷大岩屋村應曆寺延岡領青蓮末 一鎮守四所権現ノ岩屋 一千手観音堂、一妙見ノ岩屋、一十一面観音ノ岩屋、一不動堂、云々」とあり、『太宰管内志』の国人伝には「・・・溪流より一町余登て寺あり入四間横六間の堂なり南向にして本尊は不動明王・・・一町余登て講堂あり入三間に横四間ノ堂なり是も南向にして本尊は正観音又一町登て岩洞に千手観音の堂あり道邊に諸石佛多し・・・」という。一方、應曆寺の旧跡は三町ほど南にあってその跡は広く、その川端にある不動は古の講堂の本尊であり、正月5日には鬼走りが行われていたという。また、應曆寺の奥ノ院の姥ヶ懐（ウバガフトコロ）は六郷満山峰入行場の一つであり、21年目の入峯の時に、行者がここで帯を解き汗を拭って美食することをゆるされる所という。現在地に寺を中興したのは、両子寺の順慶法印の弟子の登慶（澄慶）である。
- 10 『豊後國志』に「應曆寺 在眞玉莊大岩屋村、號大岩山」

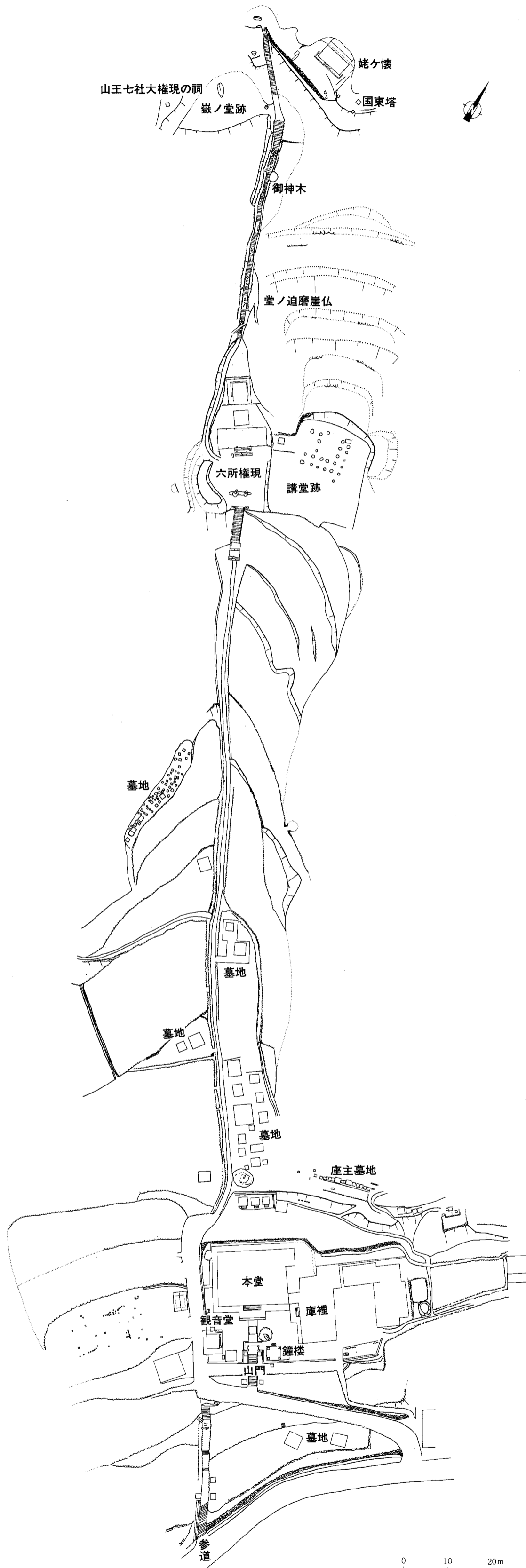
（2）遺構の状態

應曆寺に関する遺構（第25図）としては、本堂・庫裡・観音堂、墓地群、講堂跡、六所権現、堂の迫磨崖仏、山王社、奥ノ院の姥ヶ懐をはじめ、妙見ノ岩屋、十一面観音ノ岩屋（第26図）、不動堂が確認でき、末寺としては有寺の多宝院と西弘の弥勒寺がある。

地元の土谷宗利氏（明治44年生まれ）によると、六所権現は大正の始めに、奥の院から現在地に下ろして祀ったものであるという。また、坊名としてはエダリ坊、坊畑が聞き取りできた。

本堂・庫裡・観音堂（第25図）

應曆寺の参道右境内には昭和5年～7年改築した本堂・庫裡をはじめ、観音堂、鐘楼、薬医門形式の山門（第27図）などがある。『太宰管内志』によると、現在地に寺を中興したのは、両子寺の順慶法印の弟子の登慶（澄慶）であるという。これは、『寺院沿革史』によると、寛永2年（1625）の澄慶であり、明治23年の『県政資料寺院明細牒』では元禄8年（1695）の僧澄慶による中興とある。当寺には県指定の平安後期の不動明王座像や町指定の鎌倉期の千手観音・不動明王立像、室町期の阿弥陀如来座像、灯明石像、宝篋印塔などがあり、石造仁王、曼陀羅置石などもある。



第25図 大岩屋 (大岩屋山應曆寺) 実測図 (1/800)

墓地群 (第25図)

本堂・庫裡の裏側や参道の左右には幾つかの墓地群があるが、いずれも、近世～現代の墓地である。最古のもので、貞享元年(1684)の「**眞道教為菩提**」があり、文政5年に「現住順盛再建 元禄8年(1695)乙亥年 中興法印澄慶墓」がある。

六所権現 (第25・28図)

本堂・庫裡から緩傾斜の参道を登り始めると、左側に数段の平坦面がある。これを過ぎると左右に山の斜面が迫る谷状部となる。参道の突き当たりが六所権現である。文政2年(1819)の六所大権現の鳥居があり、面積約250㎡の敷地に、神殿、申殿、拝殿、前庭部がある。土谷氏によると、六所権現は奥ノ院の岩屋に祀られていたものを、大正時代の初めにこの地に遷座したものであるという。

安貞2年(1228)の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』に「・・・六所権現於御寶前、二季祭五節等、今始御祈祷・・・」とある後は、元禄14年(1701)の應曆寺古文書に「四所権現岩屋」、安永5年(1776)の『六郷満山寺社名簿』には「鎮守四所権現岩屋」、『天明年中(1781～1788)六郷山寺院名簿』にも「鎮守四所権現ノ岩屋」とあり、六所権現から四所権現に変わっている。しかしその後、文政2年(1819)には六所大権現の鳥居が示すように、再び六所権現として当地に祀られている。

講堂跡 (第25・29図)

六所権現に向かって、右の隣接地に講堂跡の礎石が遺存している。講堂跡が遺存する敷地面積は約400㎡であり、講堂の前庭は広い。講堂跡は若干高く、長軸は心持ち参道側に向いている。講堂の礎石は径約60～100cmの自然礫であり、5間・4間に並べている。『太宰管内志』に「入三間に横四間ノ堂なり是も南向にして本尊は正観音」とあり、この遺構を指したものである。

堂の迫磨崖仏 (第30図)

六所権現の左側の参道を登ると、右側の斜面部に県指定の堂の迫磨崖仏がある。室町時代の作といわれ、六観音や六地藏などが刻まれている。

人為的平坦面 (第25図)

参道の急な階段を登ると(第31図)、右側に樹齢約450年という杉の巨木があり、御神木と呼ばれている。ここを少し登った参道左側には人為的な平坦面がある。この一帯はタケン堂と呼ばれている。享保2年(1717)に焼失した嶽の権現社が祀られていたという跡であろう。平坦面は約150㎡であるが、どの様な社が祀られてあったのかは判らない。この参道両端には、かつて石造仁王が建っていたという。現在の観音堂にある仁王がそれである。

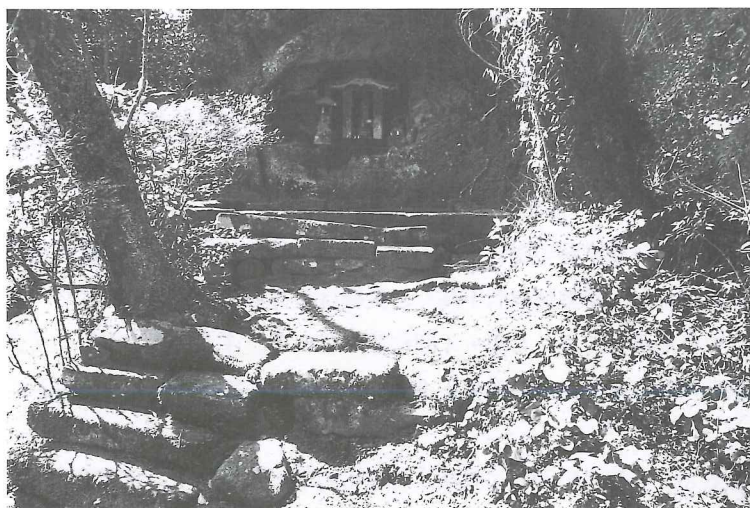
山王七社大権現 (第25・32図)

上記した人為的平坦面の西隅の斜面部に「山王七社大権現」の石祠がある。祠の奥壁の内側には種子曼陀羅が刻まれている。

奥ノ院の姥ケ懐 (第25・33図)

参道の最奥部の右側に奥ノ院の姥ケ懐がある。洞窟は間口12m、奥行き6mであり、前庭部は

約50㎡である。洞窟の上部にはお堂を建て懸ける彫り込みがある。現在、洞窟内には小さなお堂が建っており、東の端には室町期の国東塔の断片が2基分遺存している。この洞窟を姥ヶ懐（ウバガフトコロ）と呼んでおり、六郷満山の峰入行場の一つである。21年目の入峯の時に、行者がここで帯を解き、汗をぬぐって美食することを許される場所という。

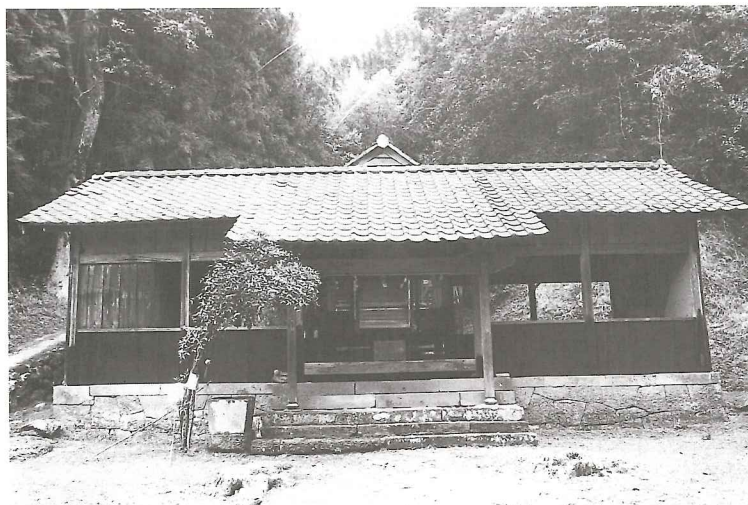


第26図
十一面観音ノ岩屋



第27図
應曆寺の薬医門と
石造仁王

第28図
應曆寺の六所権現



第29図
應曆寺の講堂跡



第30図
堂の迫磨崖仏





第31図
参道の石段と御神木



第32図
山王七社大権現の石祠



第33図
奥ノ院の姥ヶ懐

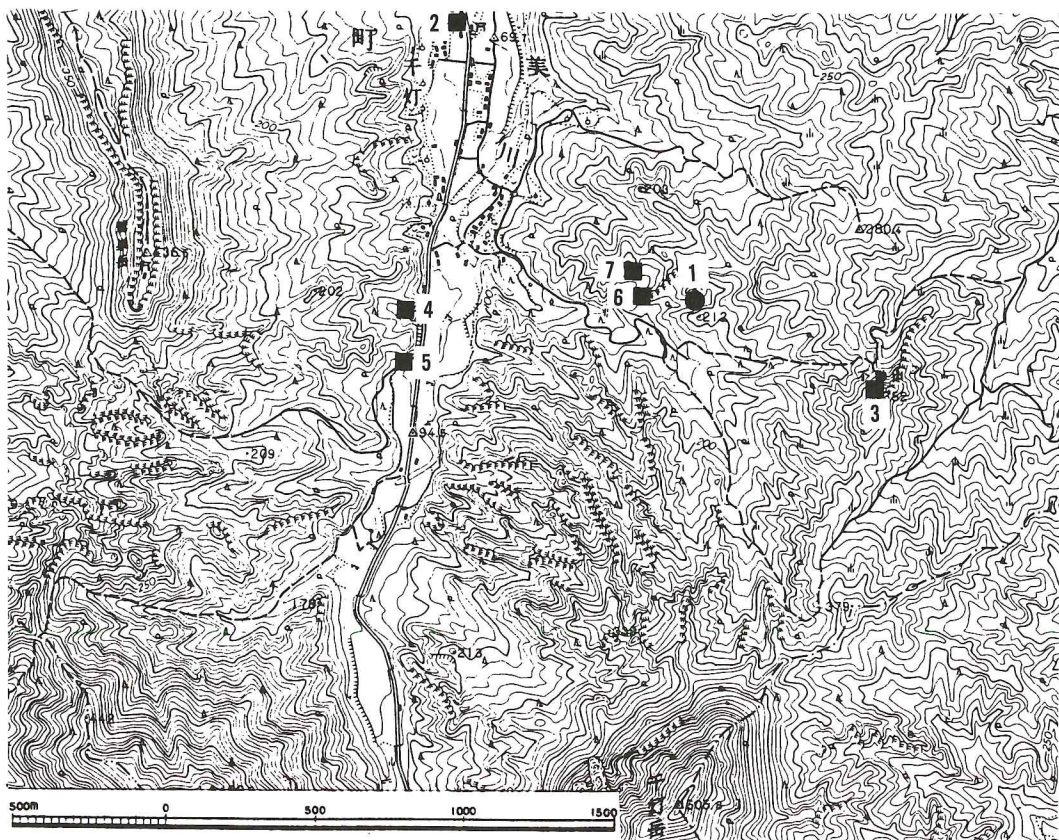
V. 千燈岩屋（補陀落山千燈寺）

（1）位置と環境

国見町千灯、千燈岳から派生する北尾根の不動山中腹に旧千燈寺の伽藍が階段状に遺存している（第34図）。養老2年（718）に仁聞菩薩の開基と伝えられており、この寺は、仁聞菩薩の入定の地という伝説を持ち、仁聞菩薩に関する伝承が他の六郷山に比較して数多く伝わっている。補陀落山千燈寺は山六坊、谷六坊の12の坊から成っていたという。

千燈寺の遺構を記録の上でみると、

- 1 長承4年（1135）の『夷住僧行源解状案』に「千燈石屋」。
- 2 安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』に「中山分一千燈岩屋、本尊千手観音・・・六所権現於御寶前、二季御祭 五節供等、今始御祈祷・・・」とあり、同目録で個別に併記されていた五岩屋、岩殿岩屋、枕岩屋、銚子石屋、瀧本ノ岩屋が『太宰管内志』では千燈寺の項に含まれている。これらの岩屋はいずれも人間菩薩の伝承を伝えている。五岩屋は不動尊を本尊とし、「於五箇秘所 昔異国降伏之時 人間菩薩有五人ノ同行 五壇法



第34図 千燈岩屋（補陀落山千燈寺）の位置

- | | | | |
|------------------|---------|--------------------|---------|
| 1. 千燈岩屋（補陀落山千燈寺） | 2. 現千燈寺 | 3. 不動岩屋（五智岩屋・五辻岩屋） | |
| 4. 千燈石仏 | 5. 尻付岩屋 | 6. 普賢岩屋 | 7. 薬師岩屋 |

修行之」とあり、枕岩屋、銚子石屋は人間菩薩の枕や銚子があるという。また、瀧本ノ岩屋では「人間菩薩御自筆如法経御奉納此石屋 依之一乗菩提峯云」とある。つまり、五岩屋は五智窟や五辻岩屋と言われるように、『八幡字佐宮御託宣集』では、八幡、法蓮、華嚴、覚満、鉢能、『豊鐘善鳴録五卷』では人間菩薩以下、華嚴、覚満、体能、行満、友善の五大徳が異国降伏の祈禱をおこなった秘所であり、瀧本ノ岩屋は人間菩薩の直筆の如法経が納められた所であるという意味である。

- 3 弘安7年(1284)の『六郷山異國降伏祈禱卷數目録寫』には「中山分 千燈山」
- 4 嘉元2年(1304)の『六郷屋山例講谷役配分注文』に「千燈山」
- 5 建武4年(1337)の『六郷山本中末寺次並四至等注文』に「中山一千燈山 限東久保アメ牛淵 限西キノコ畑 限南七曲 限北雨乞下岩鼻・・・」。
- 6 暦應元年(1338)の『六郷山別當光澄下文』に「・・・千燈山・・・」。
- 7 『太宰管内志』に収録された、室町時代といわれる『六郷山定額院主目録』に「補陀落山 千燈寺、嶺松院ノ徒呂三十八箇所、権現、観音、大講堂、高野、五岩屋、千灯下佛房也 來死海薬師、伊美ノ平等寺、伊美ノ萬徳寺、神宮寺也」という。
- 8 天文18年(1549)の『六郷山異國降伏祈禱卷數并山々勤行次第目録寫』に「千燈山」・・・」
- 9 『豊鐘善鳴録五卷』には「聞又率巖満等 登伊美ノ五智窟 行不動ノ法時 東北海ノ龍王 欽仰其徳献燈 一千許縁其靈應 寺名千燈 其號補陀落山者 以安千手眼ノ像也 其年10月念6日 於千燈之窟入定 封塔以三楞石」とあり、千燈寺の名は東北海ノ龍王が人間の「欽仰其徳」して千燈を献じたことにより、補陀落山は「以安千手眼ノ像也」という。また、人間は千燈の窟で入定し、「封塔以三楞石」という。
- 10 『太宰管内志』の『天明年中(1781~1788)六郷山寺院名簿』には「千燈村千燈寺、杵築領、山門末、仁聞入寂之地 本堂千手 六所権現、山王権現、薬師ノ岩屋、大講堂、地主権現、大師堂、尻付ノ岩屋、普賢岩屋、大不動ノ石屋、奥ノ院不動ノ石屋、退轉牛王石屋、小不動ノ石屋、八大龍王石屋」が記され、末寺として、平等寺、全光寺、眞學寺が記録されている。また、千燈寺は南向きで「入五間に横八間」の堂で本尊は不動明王、講堂も南向きで「入三間横四間戸口一間泥壁なり 本尊は弥勒菩薩傍佛は観音なり」とある。「一町余登て六所権ノ社あり、此向ノ方一丁許上に大師堂あり其左右に古き五輪塔」がある。『定額目録』の「高野」とはこの場所であるという。一方、「寺下に末寺西の坊」「千燈村内に一寺あり下拂坊」があると記されている。そして、尻付ノ薬師の岩窟や西ノ不動の岩窟には人間の作った木像の古佛が数多く安置されている。これらの岩窟の他に「西ノ不動ノ邊に小不動・太郎天の二窟あり奥ノ院を加へて五窟なり」という。奥院五智窟には東向きの不動ノ堂があると『太宰管内志』には収録されている。

また、寺伝によれば、天正年間に兵火に罹り、天正15年(1587)には源統幸が再興し、慶長年中に松井佐渡守修理を加え、その後領主能見家によって寺勢を回復していったとう。

(2) 遺構の状態

以上のように、文献資料で出てくる主要な堂宇を瞥見したが、文献の成立年代ごとに石屋の名称が異なっており、これらを現在の遺構に比定していくのは至難である。

ここでは、明治頃とみられる旧千燈寺の境内全図を参考にして、伽藍の配置を簡単にみている。今回、図示した遺構は(第36図)、西ノ坊、護摩堂(本堂)・庫裡、山王堂、講堂、地主権現、本堂(奥ノ院)、仁聞菩薩御廟、六社権現堂、弘法堂と二つの五輪塔群である。

現千燈寺

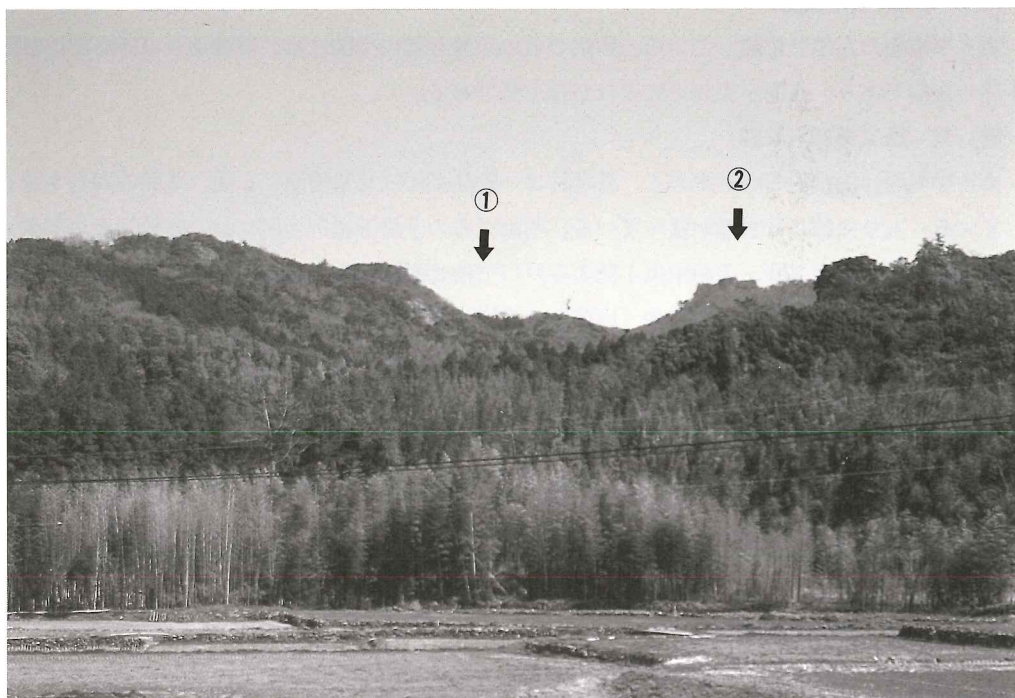
現千燈寺は伊美川上流左岸の段丘上に位置している。『国見町沿革史』によると、明治になって旧千燈寺の「西ノ坊」が移転し、現千燈寺近くの旧「下払坊」(法教寺)と合併して当地を寺地としたものという。現千燈寺には県指定の千燈寺木造如来座像、石造宝塔、修正鬼会面4面と、町指定の石造不動明王・二童子像、太郎天像などが相伝され保存されている。

千燈石仏(第37図)

伊美川上流左岸の段丘上の不動山の入り口にあたる不動口には県指定の千燈石仏がある。高さ約1m、幅約1.5mの板状の岩石に、阿弥陀如来と二十五菩薩が厨子中の往生の行者を迎える来迎図を刻み出している。鎌倉時代の作といわれている。

西行戻し

旧千燈寺の参道の登り口付近は慶応元年(1865)の鳥居、磨崖仏、板碑、宝篋印塔などがあり、「西行戻し」という石段がある。西行が千燈寺を訪れたとき、寺の小僧と問答して負け、ここか



第35図 ①は旧千燈寺の遠景、②は五辻岩屋

ら引き帰したと言う伝説である。ちなみに、その問答は、「小僧その綿はうるか」と聞いた西行に、「谷川の瀬に住む鮎の腹にこそうるかといえるわはありけり」というもので、この種の伝説は各地に残っている。

西ノ坊跡（第36・38図）

参道をさらに登り、仁王門と文化13年（1816）の六所宮の鳥居を過ぎると、自然礫のゴロゴロした谷の参道となり（第39図）、左側には階段状の平坦面が4面形成されている。いずれも大きな石垣を配している。その下から第2平坦面は西ノ坊跡と呼ばれ明治頃までここに坊があったという。面積は約670㎡の坊跡である。ここには、嘉永5年（1852）の法華経千部供養塔、天保15年（1844）の仁王経塔が建てられている。

本堂跡（護摩堂）（第36・40図）

第5平坦面は大字千燈寺迫であり、一對の石造仁王を残す面積約800㎡の本堂跡である。本堂は上がり階段と基壇、礎石を残している。『太宰管内志』には、南向きで「入五間に横八間」の堂で本尊は不動明王と記録されている。本堂に向かって右側は玄関、庫裡、長屋と続き、右端隅には湧き水の泉水を備えている。石造仁王は板石に厚肉彫りしたもので、向かって右が高さ193cmの阿金剛、左が高さ180cmの吽金剛である。造立年代は近世であろう。また、本堂の入り口には石風呂（第41図）が置かれている。長さ185cm、幅91cm、高さ51cmで、内則は長さ159cm、幅71cm、深さ40cmある。石風呂と呼ばれているがその用途などは推測の域を出ていない。

山王堂跡（第36図）

第6平坦面の左端に位置している。明治ごろの千燈寺境内全図には、寄棟造りの草葺きで3間、1間の規模であり、正面中央の戸口のほかは土壁である。

講堂跡（第36・42図）

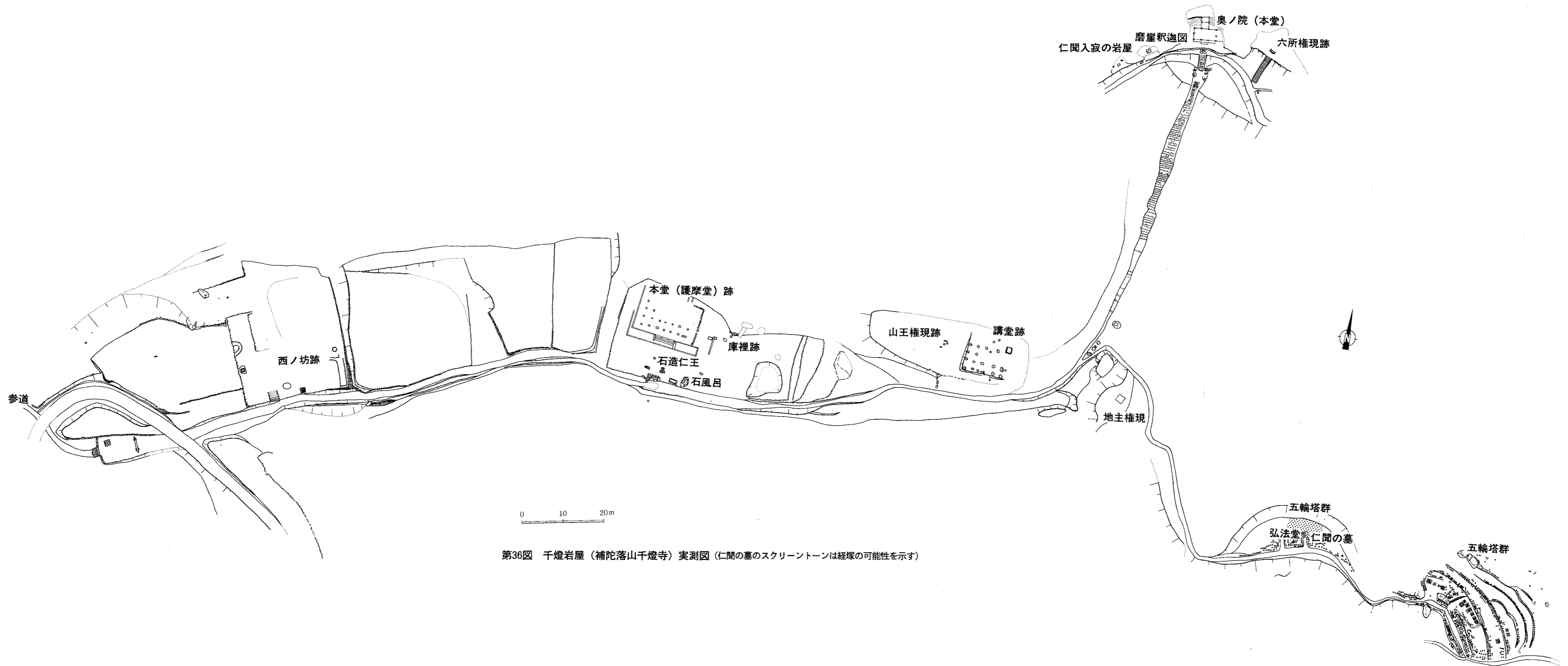
第6平坦面は面積約500㎡である。講堂跡は一段高くなった基壇部に5間、3間の礎石が遺存している。入り口部には水盤が残っている。明治ごろの千燈寺境内全図には、寄棟造りの草葺きで、正面5間、側面3間、正面中央1間のみ戸口で他は板壁に描かれている。昭和の初めまで建物が残っており、「三間四方の身舎（内陣）の周囲に庇を廻らし、身舎中央後方に柱を立て仏壇廻りを囲う形式」であったという。『太宰管内志』には、講堂は南向きで「入三間横四間戸口一間泥壁なり 本尊は弥勒菩薩傍佛は観音なり」とある。

地主権現（第36図）

西ノ坊から略直線の坂道の参道は講堂を過ぎたところで大きく左にカーブし、奥ノ院と五輪塔群とに分かれている。地主権現はこの分岐点の右側の斜面部に位置している。面積約80㎡である。弘化3年（1846）の小さな石祠が南向きに立っている。

奥ノ院本堂（第36・43図）

奥ノ院に向かう急な石段の参道を登り詰めると、真正面が奥ノ院本堂である。ここには4つの岩屋がある。奥ノ院本堂は昭和43年の山火事後の再建である。かつて、堂の柱には天保8年（1837）、



第36図 千燈岩屋（補陀落山千燈寺）実測図（仁聞の墓のスクリーン・トーンは経塚の可能性を示す）

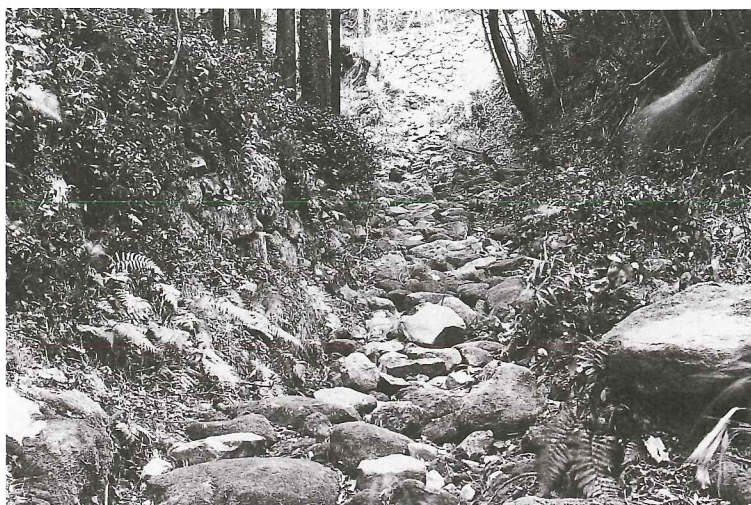
第37図
千燈石仏



第38図
西ノ坊跡



第39図
参道





第40図
本堂（護摩堂）跡



第41図
石風呂



第42図
講堂跡

第43図
奥ノ院本堂



第44図
来迎磨崖仏



第45図
六所権現の岩屋に納め
られていたという石造
宝塔（基礎は後補である）



嘉永6年(1853)の峯入りの墨書があったという。お堂のなかには千手観音、不動明王、毘沙門天を祀る。また、岩屋内は洞窟の奥壁に沿って4～5段の壇を設け、観音像を多数安置している。

一方、堂に向かって洞窟の左岩壁には、来迎磨崖仏が陽刻されている。阿弥陀と菩薩8軀、飛天1軀、念仏者が描かれているというが風化が著しい。一部に朱彩色が残っており、鎌倉時代の製作という。(第44図)

六所権現堂跡(第36図)

奥ノ院本堂に向かって右側の洞窟が六所権現の岩屋という。奥ノ院の岩屋より4～5mも高い位置にある。明治ごろの千燈寺境内全図には、3間四角の方形造りの建物として描かれている。かつて、この岩屋に現総高59cmの石造宝塔が安置されていた。

この宝塔は(第45図)安山岩製の塔身と笠部であり、基礎石は後補である。笠の傾斜は緩やかに張り出し、上部には露盤が付くが、宝珠や九輪部は欠損している。笠裏には首部を嵌め込む削り込みがある。茶壺型の首部付き塔身には納入孔があり、塔身胴部にも縦長の納入口(7×20cm)が切られており、蓋石が嵌め込まれている。納入孔や納入口の形態から、経典や仏像、あるいは経筒が納められていた可能性も高い。国東塔の先駆的な様相を呈する。中野幡能氏は安貞2年(1228)の目録にある「瀧本ノ石屋」をここに比定している。瀧本ノ石屋は「人間菩薩御自筆如法経御奉納此石屋」であるという。

人間菩薩御廟(人間入寂の岩屋)(第36・46図)

奥ノ院本堂に向かって左側の小さな洞窟が人間入寂の岩屋である。明治ごろの千燈寺境内全図には、人間菩薩御廟として方形造りの小さな建物が描かれている。現在ここには、小さな厨子が安置されている。安貞2年(1228)の目録にある「枕岩屋」であろう。

記録にはないが人間入寂の岩屋に向かって左側には小さな岩陰がある。ここには火輪(笠)が三角形の異形の五輪塔が安置されている。銚子を形作ったとも考えられる。「銚子石屋」を意図したものであろうか。

千燈寺墓地群

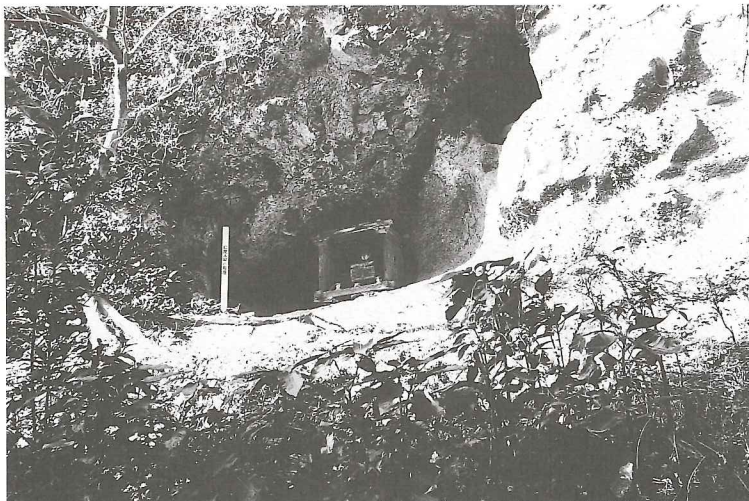
弘法堂跡・仁間の墓と五輪塔群(第36・47図)

講堂跡を過ぎた所で参道は二つに分かれるが、右側の斜面を登り詰めると、千燈寺墓地の石塔群がある。尾根に沿って夥しい五輪塔群が二箇所群在している。総数は千基を下らない。手前の五輪塔群が弘法堂跡・仁間の墓(第47・48図)と称する国東塔を中心としたまとまりである。

この一帯は緩い斜面を弓なりに造成して約250㎡の平坦地を造っている。弘法堂跡は偏平盤を積み重ねた、3m四角の基礎の部分が残っている。また、仁間の墓と称する国東塔の製作年代は南北朝期頃とみられている。国東塔は他にも2基あり、小さな板碑も若干あるが、残りの殆ど全部は五輪塔である。この一帯の石造品は合計140基前後である。

『豊後國志』には次のような興味深い記録がある。「僧仁聞墓 在伊美郷千燈寺。相傳近世墓樹將枯。寺僧改栽焉。欲去其故根。掘之尋餘。砂礫甚多。發之則得銅筒三。發蓋視之。皆白舍利也。乃知仁聞遺骨也。又旁有小壺十五。圍繞其銅筒。壺中皆土砂充之。遂瘞如故立石」というも

第46図
仁間入寂の岩屋



第47図
弘法堂・仁間の墓と
五輪塔群



第48図
仁間の墓





第49図
五輪塔群

ものである。この記録は佐藤蔵太郎の『豊後史蹟考』（1905年）にも収録されている。「〇仁間の墓 伊美郷千燈寺に在、寛政年間（1789～1801）墓樹將に枯んとするより、寺僧改め栽んとし、之を掘ること四五尺、忽ち砂礫甚だ多きより之を發けば銅筒三筒あり、蓋を發て之を視るに、皆白舍利なり、又傍に小壺十五箇ありて、其銅筒を圍繞たるか、壺中は土沙を以て充たりと、乃て再び之を埋め、故の如く石を立てしといふ、」というものである。

つまり、寛政年間に寺僧がこの場所を120～150 cmほど掘ると、砂礫に覆われて銅筒が3本出てきた。筒の中はどれも白い舍利であった。その銅筒のそばには、土砂の入った小壺が15個あって、銅筒を取り巻いたように置かれていた。そこでこれを埋め戻し、もとのように石を立てた。という記録である。これは、その文面から3本の銅筒の発見の有り様ともとれそうである。銅筒の中の白い舍利は経巻の石化したものとも推測でき、これを仁間の舍利と勘違いしたものとも考えられる。15個の小壺は副納品であろうか。

「仁間の墓」という国東塔は南北朝期のものでり、「得銅筒三」場所が確定できないが、千燈寺墓地石塔群の弘法堂跡・仁間の墓という位置が千燈寺経塚であった可能性は高いといえる。

五輪塔群（第36・49図）

弘法堂跡・仁間の墓を中心とした五輪塔群を過ぎると、夥しい数の五輪塔が群在する場所に着く。ここには3基の国東塔をはじめ、宝塔、宝篋印塔、板碑、角塔婆などがごく僅かに混在するが、五輪塔が圧倒的である。五輪塔群は面積約600㎡の緩やかな斜面に群在し、弧状の基壇を数段に設けた上に並べて安置されている。まさに壮観であり、約900基前後はある。

これで、千燈寺墓地の五輪塔群は総数約1,000基強といえることができる。

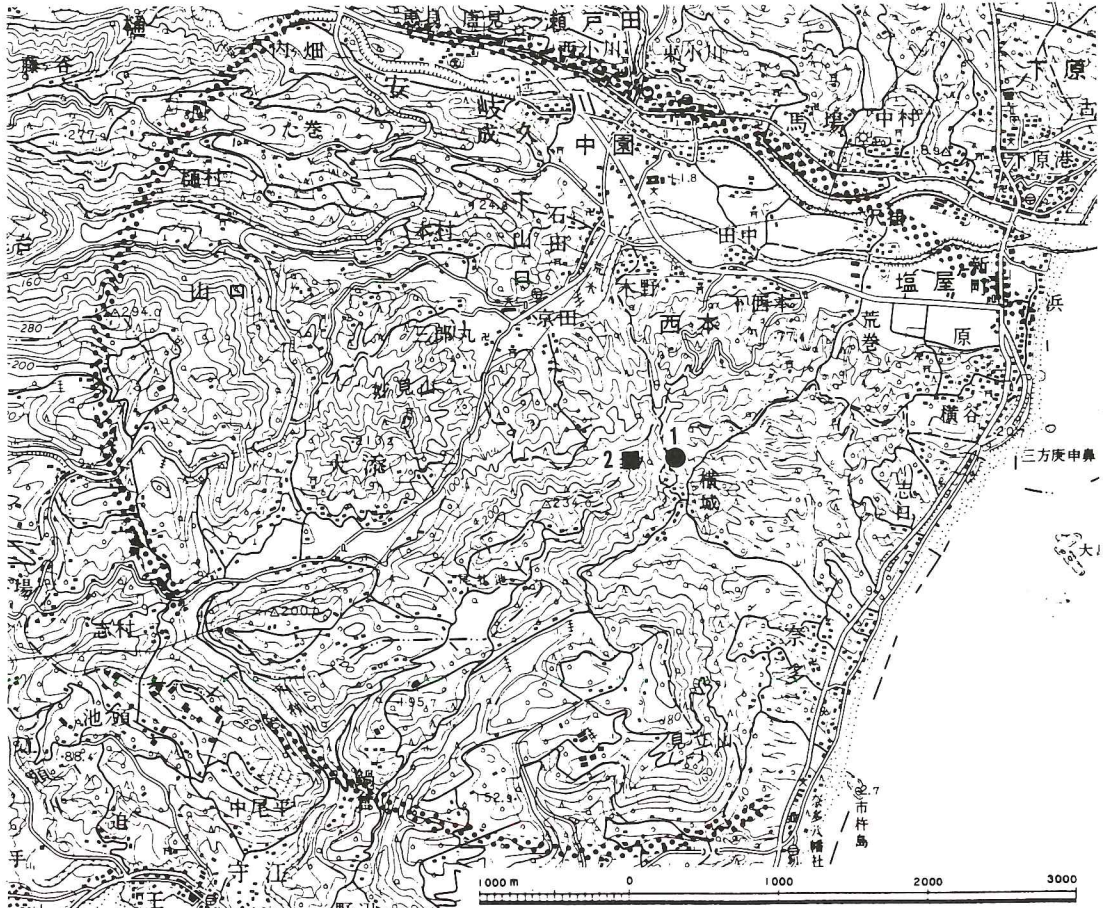
VI. 横城山（横城山東光寺）

(1) 位置と環境

六郷山中山本寺の横城山（横城山東光寺）は杵築市大字横城四番地に所在する（第50図）。その沿革は他の六郷山寺院と同じく、人皇四十四代元正天皇の養老2年（718）仁聞菩薩の開基という。本尊は薬師如来である。

『八幡宇佐宮御託宣集』大巻11には五躰投地し難行苦行の修行を行った能行聖人に、昔の人間菩薩・弥陀如来が巡礼の次第を「・・・此の山に修行するに、二つの路有り。後の山の石屋より始めて、横の城に至るべし。又海路辺地を経巡るべきなり。我昔の修行此の如し。・・・」と告げる記述がある。このことはつまり、横城山東光寺は、後山から峰巡礼をはじめて横城山で終わるという山岳ルートの特典であったことを意味している。

東光寺は杵築市の東北端、海岸より約2.5km奥の横城山東山腹に位置し、眼下に別府湾や四国を遠望できる海岸段丘上に選地されている。（第51図）



第50図 横城山（横城山東光寺）の位置と建武4年の四至（スクリーントーン）

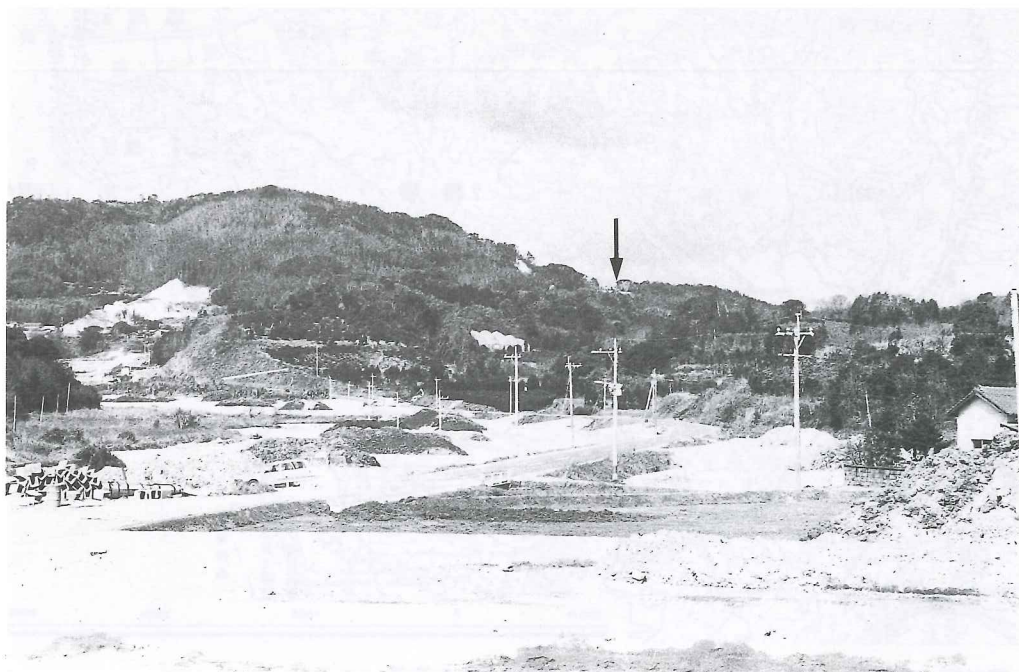
1. 横城山（横城山東光寺） 2. 日吉社

平成4年に、東光寺境内の裏山で海砂採取中に経筒の発見があり、横城山東の尾根の鞍部に経塚群が埋設されていることが確認された。東光寺経塚は平成4～5年度にかけて、杵築市教育委員会で発掘調査中である。現在、経塚の石室は10基検出している。

平成4年度の『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ』で六郷山寺院の奥ノ院とその周辺部に経塚が埋納されていることを指摘したが、東光寺経塚の設営地点は横城山東光寺の伽藍の最奥部であり、奥ノ院とその周辺部に相当しそうである。しかし惜しいことに、東光寺境内の周辺部は砂の採取で大きく原地形が削られ変貌しており、その上、寺の参道が確定できず、その伽藍配置を明確にすることは出来なかった。

横城山東光寺とその遺構に関する記録をみると、

- 1 貞應2年(1223)の『大友能直譲状』に「安岐郷横城山院主職・・・」
- 2 弘安7年(1284)の『六郷山異國降伏祈禱卷數目録寫』に「中山分 横城山」。
- 3 嘉元2年(1304)の『六郷屋山例講谷役配分注文』に「横城山」。
- 4 建武4年(1337)の『六郷山本中末寺次並四至等注文案』に「中山一横城山 限東タチ(ケ)ノ隈 限西日ノ牟礼 限南カリ宿堺 限北松弘堺・・・」。
- 5 暦應元年(1338)の『六郷山別當光澄下文』に「・・・横城半分・・・」。
- 6 『太宰管内志』に収録された、室町時代といわれる『六郷山定額院主目録』に「横城山東光寺、院主眞乗院ノ徒、十二房」。
- 7 天文18年(1549)の『六郷山異國降伏祈禱卷數并山々勤行次第目録寫』に「横城山・・・」。
- 8 『仁安3年六郷二十八山本寺目録』に正宗分中山十箇寺「横城山東光寺」。



第51図 横城山東光寺の遠景(矢印が東光寺経塚の位置)

- 9 安永5年(1776)の『天台宗豊後国六郷山寺院名簿』には「安岐郷横城村横城山東光寺 杵築松平筑後守領 右山門末 檀那 三十軒、一六所権現宮 一本堂薬師 日光月光 十二神將、一堂三・・・末寺 経田阿弥陀 在山口村 覚安寺 在西本村・・・」。
- 10 『太宰管内志』の『天明年中(1781~1788)六郷山寺院名簿』に「安岐郷横城東光寺杵築 領、山門末、一六所権現 一本堂薬師十二神將、一堂三・・・東光寺末寺西本村覚安寺・・・」。
- 11 明治7年(1874)の『神社書上帳』には「一権現社 日吉社ト改称願 祭神 従前不詳 大山咋命ト改称願」。
- 12 明治23年(1890)の『寺院明細牒』には本堂庫裡(竪五間四尺、横拾壹間三尺)と薬師堂(竪二間一尺、横二間一尺)がある。

(2) 遺構の状態

横城山東光寺は現在、本堂を残すのみであり、寺域には石造物などは少ない。地元の矢野直美氏(明治43年生まれ)の話によると、かつては国東塔や五重ノ塔などがあったが散逸したという。東光寺に関する遺構としては、聞き取りも含めて、本堂・庫裡、護摩堂、観音屋敷(観音坂)、薬師堂、経塚群、楠木屋敷(古屋敷)と墓地、日吉社などがある。

本堂庫裡(第52・53図)

横城山から派生する丘陵端部を削り、面積約700㎡の平坦面を形成している。現在の本堂は東向きの小さな平屋の建物であるが、明治23年(1890)の『寺院明細牒』には本堂庫裡(竪五間四尺、横拾壹間三尺)とある。矢野氏によると、大正時代の始めまで本堂と薬師堂で交代に鬼会が行われていた記憶があるという。田中進氏(昭和9年生まれ)によると、本堂の西下にある小道を約80m程度下った位置に小さな泉があり、鬼会のとき手足を洗い清めたという。鬼会のコーリトりの場所であろう。

護摩堂跡(第52図)

本堂の南方15mの位置にあったと言われている。現在は道路に削平されて、その痕跡も確認できない。

観音屋敷と観音坂

本堂・庫裡の東南部には観音坂という古道の一部があり、その一角には観音屋敷と呼ばれている狭い平坦地がある。田中氏の屋敷であり、当地はカンノサカと呼ばれている。

薬師堂跡(第52図)

本堂・庫裡の西側には古い小道が縦に走っており、横城山から派生する丘陵の鞍部へと続いている。小道の右側は竹藪や雑木が生い茂る階段状の平坦面がある。このあたりは「堂の前」と呼ばれていた水田であった。この小道の最奥部の丘陵斜面には薬師堂があった。明治23年(1890)の『寺院明細牒』には本堂庫裡と薬師堂(竪二間一尺、横二間一尺)が記載されている。この一帯は現在、真砂採取の造成が行われており、原地形は変貌している。原形を留める部分を駆使し

て、薬師堂の敷地を推測すると、約 200 ～ 300 m²の平坦面を形成している。

東光寺経塚群（第52・54・55図）

薬師堂の上手、横城山から派生する丘陵の鞍部には経筒が埋納された経塚群がある。経塚の発見は、真砂採取の造成に伴うものであり、現在、杵築市教育委員会により発掘調査が行われている。経塚は偏平な自然礫を組み合わせる石室を造り、銅経筒や和鏡を蓋にした陶製経筒を埋納したもので、空間部は木炭で充填している。中でも、4段積上式の経筒（第55図）は北九州を中心に分布しており、県内では、緒方町大行八幡、伝大分市高城観音吉祥院に次ぐ事例である。検出した経塚の石室は10基、経筒は表面採集を含めて13点分が出土している。

楠木屋敷（古屋敷）と墓地

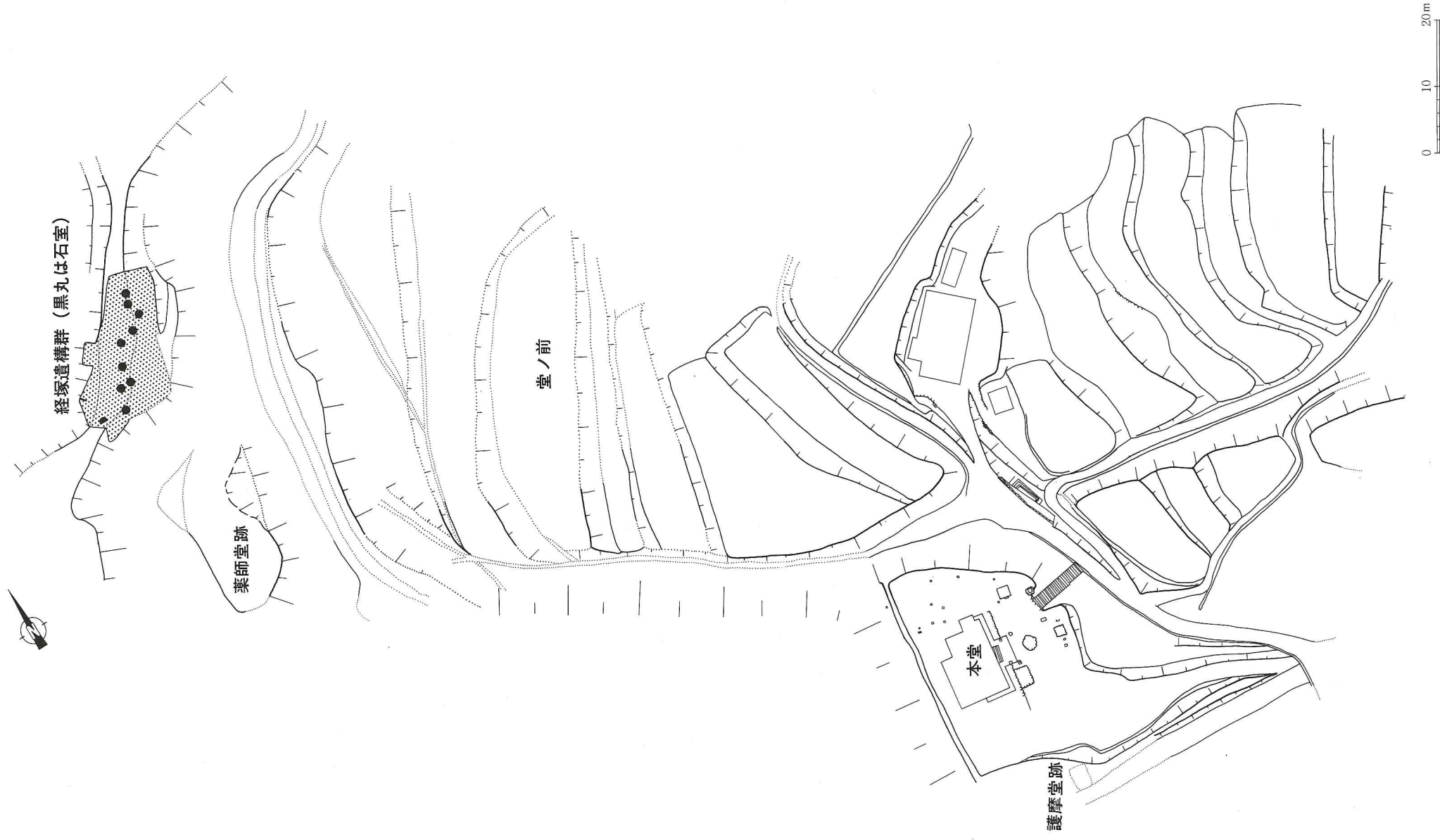
横城山の丘陵部には、楠木屋敷（古屋敷）という狭い敷地の平坦面がある。矢野氏の話によると、東光寺は黒田長政の焼き討ちにあい、この楠木屋敷（古屋敷）の場所から、現在の本堂・庫裡の所へ移ったという。このことは、東光寺の本堂が移転したのか、院主坊から庫裡へ移転したのかは判らない。

その近くには東光寺の住職の墓地がある。當山中興の了俊大和尚の享保19年（1729）の墓碑を中心とした近世墓である。最古は元禄9年（1696）の「天台沙門金剛佛子賢秀大徳位」の墓碑である。

ちなみに、古屋敷よりやや下った矢野喜多二氏の家の裏側には産部屋を作ったという狭い空間がある。豊後高田市の長安寺の不浄道や産小屋は、智恩寺にもあったとつたえられており、どこまで遡るか判らないが興味深い。

日吉社

横城山頂には日吉社と寛政4年（1792）の山神の石祠がある。安永5年（1776）の『天台宗豊後国六郷山寺院名簿』には「安岐郷横城村横城山東光寺・・・一六所権現宮・・・」とあり、『太宰管内志』の『天明年中（1781～1788）六郷山寺院名簿』に「安岐郷横城東光寺・・・一六所権現・・・」となっているが、寛政3年（1791）の鳥居には「日吉社」とあり、文化元年（1804）の石灯笼も奉納されている。明治7年（1874）の『神社書上帳』には「一権現社 日吉社ト改称願 祭神 従前不詳 大山咋命ト改称願」とあり、東光寺の六所権現は日吉社に改まっている。



第52図 横城山 (横城山東光寺) 実測図

第53図
横城山東光寺の本堂



第54図
東光寺経塚発掘状態
1～11（8は欠番）は
石室である。
（杵築市教育委員会提供）



第55図
4号経塚の4段積上式
経筒の出土状態
（杵築市教育委員会提供）



第五章 補陀落山千燈寺の法会

(1) 千燈寺の年中行事

①千燈寺の年中行事

千燈寺では、さまざまな法会を今なお行っている。

旧正月 7日	修正鬼会。現在は読経だけを行っている。
1月16日	大般若転読。
1月28日	五辻不動初不動春季大祭。
4月 8日	降誕祭（花祭り）。釈迦如来の誕生を祝う日。
6月 4日	山家会（さんげえ）伝教大師の忌日。
7月30～31日	金剛童子祭り。
8月 1日	大般若転読。
旧8月28日	不動尊秋季大祭。
旧10月20日	観音祭。
旧11月14～15日	金剛童子祭。
旧正月24日	天台大師会。天台智顛の忌日。

②金剛童子祭り

西の坊（現在の千燈寺）跡の道を隔てた北側に八大龍王が祀られていたが、明治初頭の神仏分離以後は龍神社となった。「天明年中六郷山寺院名簿」によれば、千燈寺には八大龍王石屋（現在所在不明）があったというが、この龍神社は八大龍王岩屋の後身といえることができる。江戸時代には、八大龍王には金剛童子も一緒に祀られていたという。それは千燈寺に残る「八大龍王／金剛童子／宇佐公誼」と記された扁額からも確認できる。宇佐公誼とは、宇佐神宮の大宮司到津公誼（弘化2年生／1845）のことである。現在、この扁額と金剛童子像は明治初年の神仏分離の時に千燈寺に移され、本堂左脇の室に祀られている。

現在、千燈寺区の戸数は57戸であるが、戦前には87戸ほどあったという。千燈寺区は、高地組・北台組・小野組・久保組・下松組の5つのトウバグミ（当時組）に別れている。龍神社の祭りのトウバ（当時）となって、龍神社の祭礼の世話をした当時組は、翌年の金剛童子の当時組となる。そのため、金剛童子祭りは、二番祭りとも呼ばれる。金剛童子は寺で法会が行われていたらしく、千燈寺の寺方・西の坊・下坊で毎年交代で法会を開催していた。そのため、金剛童子像を御輿に載せて移動した。その御輿は、現在旧千燈寺の普賢岩屋に置かれている。

③護符と版木

千燈寺には、次の6点の護符版木が残されており、一部は今なお使用されている。近世から現代に至る千燈寺に寄せられた庶民信仰の有り様を物語る格好の資料である。

ア、午玉宝印「午玉／補陀落山」270×(186)×15mm。この版木は約4割が欠けており、欠損部には本来「千燈寺」の文字があったと考えられる。

- イ、「大般若経／五穀豊熟／毒虫退散／祈攸」255×51×17mm。1月16日と8月1日の大般若経転読の時に配られる護符の版木。細い竹に挟んで田畑に立てて、豊作を祈ったと思われる。
- ウ、「大般若息災延命祈攸」288×54×20mm。無病と長生きを祈る護符で、大般若経転読の時に配られる護符の版木と思われる。
- エ、「修正鬼会家内安全祈攸」250×45×31mm。修正鬼会の時に、千燈寺区の各家に配られる護符。
- オ、「梵字（大日如来法身真言）ア・ビ・ラ・ウン・ケン」247×45×27mm。他の護符の内符と考えられているが、現在は使用されていない。
- カ、「元三大師（角大師）絵姿」105×55×22mm。長安寺などの現在の法会から推測すると、修正鬼会の時に配られる護符で、母屋の入口に貼りつけて門守りにしたと思われる。
- 現在、千燈寺では木版の護符の外符として、手書きの護符が作られている。半紙を折り曲げて作った紙札で、金色と赤色の水引がかけてある。
- キ、「修正鬼會御札／補陀落山／千燈寺」内符にはエの「修正鬼会家内安全祈攸」を刷った紙札が入っている。
- ク、「大般若経転読御札／補陀落山／千燈寺」内符にはイの「大般若経／五穀豊熟／毒虫退散／祈攸」の紙札が入っている。

（2）千燈寺修正鬼会

①修正鬼会の準備と差定

六郷山寺院では近世から近代にかけて多くの寺院で修正鬼会が行われていた。明治期には六郷山寺院は東組・中組・西組に組織化され、組内の寺院の僧侶たちが相互扶助的に鬼会を行うようになり、中組では旧正月5日に清浄光寺、6日に靈仙寺、7日に千燈寺で修正鬼会が執行されていた。中組で修正鬼会を実施した寺院は3カ寺であるが、その他の天台宗寺院の万徳寺（国見町野田）、普門寺（国見町鬼籠）、実相院（香々地町夷）の住職たちも、この3カ寺の修正鬼会に参加していたという。

千燈寺では昭和12年ころまで修正鬼会を完全に行っていたが、戦争で祭りの役割を担う青年達が動員されて実施が困難となり、それ以後、千燈寺の修正鬼会では立役を略して読経だけを行うようになった。

修正鬼会の準備は前年の旧12月1日のカラスツイタチから始まった。大松明作りに必要な藤カズラの採取などの準備に入り、修正鬼会までに大松明などの松明類や香水棒などの製作、それに前日には餅搗きなどを行ったのである。中組の寺院の小僧たちは、ある1カ寺に集まって修正鬼会の読経などの練習を約1カ月間行ったという。

旧正月1日から、住職・堂役・介錯・テイレシたちは精進潔斎し、毎日川でコーリトリ（垢離

取り)を行った。また、その間、千燈寺の院主は本堂の横の石の湯槽(石風呂)で垢離取りを行ったという。

修正鬼会には地元の千燈寺地区の人達が参加していた。堂役1名・介錯4名・テイレンシ10名・給仕人2名・賄い方2名・囃子3名(笛・太鼓・鉦鼓)などの役割があった。用意する松明は、大松明5本、阿闍梨松明1本、法咒師松明1本、縁起松明1本、走り松明数10本などである。また、香水棒2本・牛玉杖12本・竹飾り・ウチワ(団扇)などの道具類を新調し、餅搗きでは、お鏡餅2個、鬼のオクワエ2個、鬼の餅2個・飾り餅2個・目覚まし餅数十本を用意する。また、荒鬼や災払鬼が頭部に被る鬼のヤッシャ(石菖)も用意する。

旧正月7日はオセチといい、千燈寺地区から他地区に嫁入りなどで出た親類縁者が戻ってきて、正月をお祝いする日でもあった。7日の3時ごろ、各寺院の住職たちは小僧と人足を連れて到着した。人足は住職の装束持ちで、住職の身の回りの世話をした。人足は僧侶と同等の待遇で、修正鬼会を実施する寺院からお年玉がもらえたので、希望者が多かったという。千燈寺の門前に到着すると、法螺貝を吹き鳴らし、千燈寺でも法螺貝を吹いて鐘を衝いて迎えた。

修正鬼会は月のサオダチ(竿立ち)の頃から始まる。月の竿立ちとは、七日月(半月)が山際に落ちる時に、竿立ちするように見えることからいう。旧正月7日前後の月の入りは午後8時ごろである。そのため、修正鬼会が終了するのは、翌日の午前5時ごろになる。

まず、「装束固め」の儀式から始まる。装束固めとは、東組や西組の修正鬼会の「盃の儀」のことで、院主である千燈寺住職と介錯たちが結縁する儀式である。本堂の縁側に介錯とテイレンシたちが並び、内陣を背にした院主から盃を受ける。この時に盃と銚子を捧げて給仕するのが給仕人である。最初に院主が清めの九字を切って盃を交わす。コショウ(辛子)をたっぷり混ぜた高菜のおひたしを酒の肴にする。装束固めが終わると、石造仁王(本堂)の下方の畑で、次々に大松明の火をつける。一番の大松明に点火すると、「一番タイに火がついた」とオラブ(叫ぶ)と、出仕した僧侶が石造仁王の前で法螺貝を吹き鳴らす。大松明がテイレンシたちに担がれて次々に上がってくると、講堂の前で僧侶たちが般若心経を読誦し九字を切り、院主が加持を行う。五本の大松明を講堂の前に立て並んでから、もう一度院主が加持を行う。1本の大松明は2名のテイレンシたちが担ぐが、大松明は重いので、他のテイレンシたちも手伝う。一番のタイ(大松明)から献灯する。講堂の正面で、上下左右3回ずつ大松明を振り、「オニワヨ」と掛け声をかけて三步進み「ライショワヨ」で三步退いて、三回大松明を講堂の中に突き込む。献灯が終わると、大松明の日を消し、院主と出仕僧たちが堂内で勤行を始める。

勤行の差定(プログラム)は以下の通りである。

「伽 陀」(かだ) 法華懺法を修す。道場の諸仏を讃嘆して礼拝する。

「懺法導師」(せんぼうどうし) 法華懺法を修す。小僧などの下座の者が担当。

「序 音」(じょいん) 院主が法華懺法を読誦し、衆僧たちが唱和する。

「回 向」(えこう) 法華懺法の功德を一切に及ぼすことを願う行法。

「初夜導師」(しょやどうし) 上席の僧侶が初夜導師となり、登壇して五穀成就・蚕養如意・

国家安康を祈念する。

「仏名」(ぶつみょう) 導師が壇上で千仏名を読誦する。

「法咒師」(ほずし) 2名の僧侶が担当。天地地類の来影向を祈る。

「神分導師」(じんぶんどうし) 院主が担当。勤行の中で最も重要な行法。神々の威光増益のために神分経を読誦する。

「二相」(にそう) 三十二相。僧全員で例事作法の中の讃嘆門を読誦する。

「唄匿」(ばいのく) 四箇法要に則して行われる声明。

「散華」(さんげ) 散華を撒きながら声明を唱える。

「梵音」(ぼんのん) 四箇法要に則して行われる声明。

「縁起目録」(えんぎもくろく) 導師が仁聞菩薩による六郷山開基の縁起を述べる。

「錫杖」(しゃくじょう) 2名の錫杖師が下座で声明を唱える。

「米華」(まいけ) 2名の僧が香水棒と白米・ワラ・ひったま・みったま等を載せた膳を持って踊り、吉祥天に五穀成就を祈願する。

「開白」(かいびやく) 2名の僧が香水棒を持って踊り、五方龍王に五方の水の清浄と松明の火の安全を祈願する。

「香水」(こうずい) 2名の僧が香水棒を持って激しい法舞を行い、五方龍王に清浄な香水を祈請する。仁聞菩薩と法蓮和尚の滝行を表すという。

「四方固」(しほうがため) 院主と長老の僧が四天王を勧請し、東西南北を结界して、清浄な堂内部に魔物が侵入できないようにする。

「鈴鬼」(すずおに) 2名の僧が男女の鈴鬼に扮して踊り、最後に荒鬼を招く。

「荒鬼」(あらおに) 千燈寺の修正鬼会では、荒鬼と災払鬼が登場する。荒鬼は古代宇佐の仏教文化の旗手であった法蓮和尚と不動明王の化身、災払鬼は六郷山を創設した仁聞菩薩と愛染明王の化身と考えられている。千燈寺の荒鬼たちは堂外に出ず、その点では天念寺などの六郷山西組と同じであるが、鬼の所作は東組のものとはテンポこそ異なるが類似するという。

また、荒鬼の掛け声も「オニハヨー、ラ(ダ)イショハヨー」であった。

「鬼後咒」(きごしゅ) 院主が荒鬼たちに鬼のおくわえ餅をくわえさせて鬼を鎮め、太刀を持って鬼後咒と松明結儀を唱える。

立役は米華からで、僧侶たちは、それまでの華麗な僧衣から道服(墨染めの衣)に着替え、さまざまな所作をとまなう差定に移る。

②修正鬼会の仮面と用具

ア、荒鬼面(面長31.5・面幅23.0・面高12.0cm) 素材は楠材で、眉と鼻先には別材を矧付ける。1本角は切り欠きで面部と合わせ、竹釘で固定する。牛耳形の耳は紐で装着する。木地に直接生漆を塗布したらしく、現在は全体に暗い赤褐色を呈す。眉は墨を塗り、歯は

胡粉を厚く塗る。面構成が柔軟で、皺の溝も柔らかい曲線で刻まれており、求心的な表情をもった秀作である。裏面に「大願主 女大□□・心盛 □□・／慶長十五年庚戌□十一月□□」と墨書されている。

イ、災払鬼面（面長29.4・面幅21.0・面高12.0cm）素材は楠材で、前後に二股に別れた1本角は切り欠きで面部と合わせ、竹釘で固定し、牛耳形の耳は紐で装着する。木地に直接生漆を塗布したらしく、現在は全体に暗い赤褐色を呈す。眉は墨を塗り、齒は胡粉を厚く塗る。面構成は堅く、皺の溝も直線的に刻まれており、やや平板な表情をもつ。裏面に「大願主 下払坊 女大施主□□／心□大徳□□／慶長十五年□戌□ 作者宗□」と墨書されている。

ウ、鈴鬼男面（面長18.1・面幅14.0・面高6.0cm）素材は楠材で、全体に胡粉を塗布し、眉・髪を墨、唇を赤色顔料で塗る。目と眉は吊り上がり、眉間に皺を寄せ、厳しい表情をしている。面の頭上には粗い麻布を紐で装着し、細長い和紙を無数に結びつけて髪の毛としている。面裏には「大願主 下拂坊心盛／女大施主□□／作者宗明」という墨書がある。

エ、鈴男女面（面長19.0・面幅13.5・面高6.7cm）素材は楠材で、顔料塗布や頭上の拵えも男面と同じであるが、眉も目も緩やかな曲線を呈しており、穏やかな表情をしている。面裏には「大願主 □□□□□□／女大施主 □□女／慶長十□庚戌十一月／作者 宗明」という墨書がある。

慶長15年（1610）銘の鬼会面は、富貴寺の久安3年（1147）銘の修正会男女面を除外すると、最古の遺品である。四面の墨書を総合すると、慶長15年に千燈寺の下払坊の心盛大徳が、□□女（名称は不明）を施主にして、宗明という人物に製作させた鬼会面ということになる。心盛は権大僧都となり、寛永10年（1633）に没したという。

オ、鬼会式「初夜導師」／宝永6年（1709）丑年十二月廿九日の奥書あり。

カ、鬼会式「神分」／正徳2年（1712）壬辰暦六月十一日の奥書あり。

キ、鬼会式「千仏名」／享保十乙巳天（1725）の奥書あり。

ク、鬼会式「縁起目録」／享和四甲子（1804）三月の奥書あり。

ケ、午玉宝印／柄全長395mm・印部100×63×22mm。午玉宝印の朱印に儀式用の柄を挿入できるようにになっている。朱印の「梵字（阿弥陀如来）キリーク」の周囲を火炎宝珠の意匠で囲んでいる。現行の天念寺などの修正鬼会では、午玉杖（トシノカズ）は、ゴンズイ・梅の新枝などの木の棒の先にただの白い紙を挟んでいるだけだが、本来これは午玉宝印の紙札を挟んだもので、宝印などが省略されたと考えられる。その点、千燈寺では古式通りの午玉宝印を使用していたことが判明する貴重な資料である。

コ、木槌と斧／木製の槌は荒鬼の採り物で、木製の斧は災払鬼の採り物である。

サ、ウチワ（団扇）／全長680mmと710mmの2本。鈴鬼たちが銅製の鈴と共に持って舞う団扇で、毎年新調される。竹ヒゴと和紙でハート形の扇部を竹に造りつけている。毎年5月19日に唐招提寺で行われる「うちわまき」の行事の時に、参拜者に撒かれるハート形の団

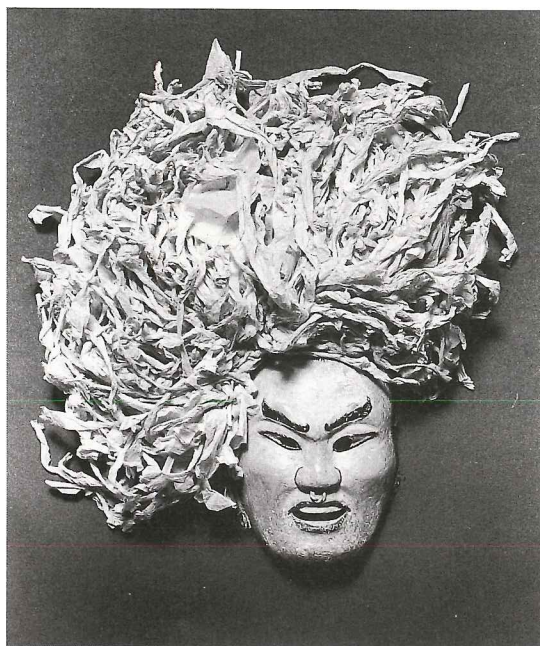
扇がある。この団扇には、鎌倉時代に唐招提寺を中興した覚盛にまつわる伝承が残されている。千燈寺の団扇は、唐招提寺の古式の団扇と似ており、同系統の団扇と思われる。



第56図 荒鬼面



第57図 災払鬼面

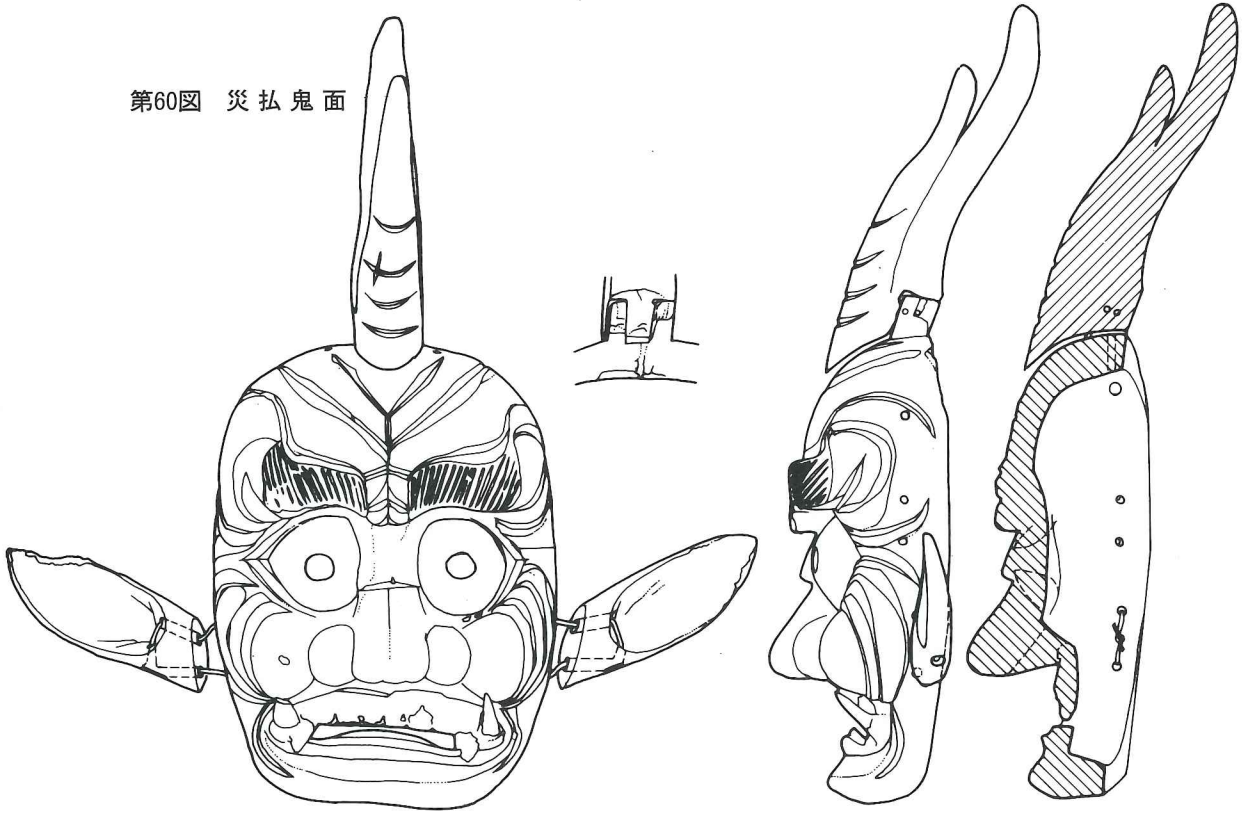


第58図 鈴鬼男面

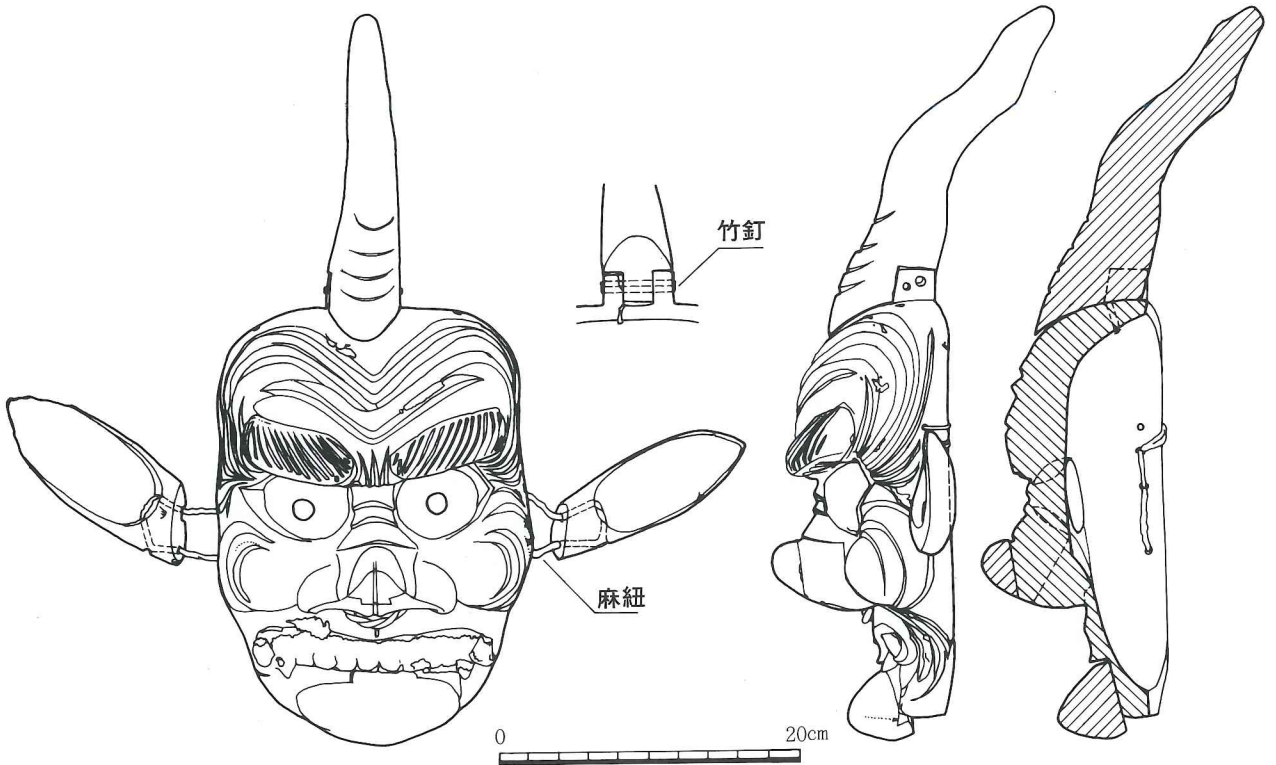


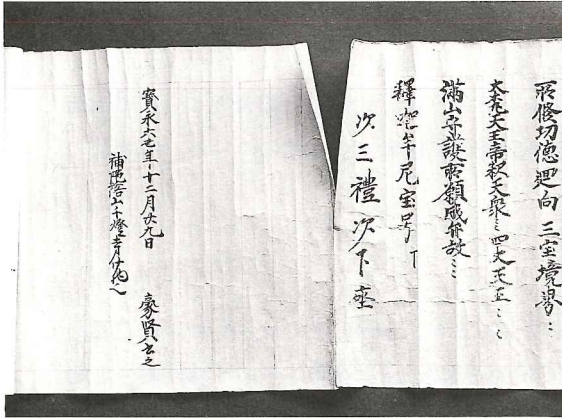
第59図 鈴鬼女面

第60図 災払鬼面

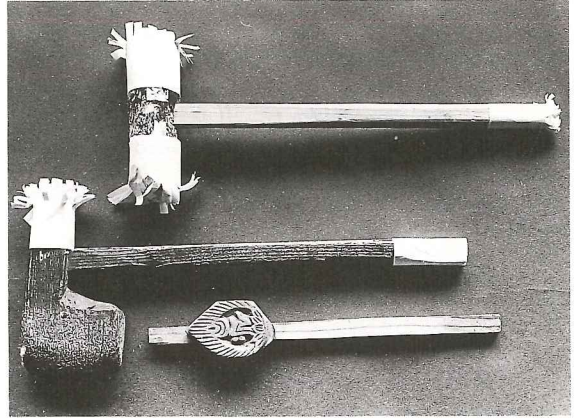


第61図 荒鬼面

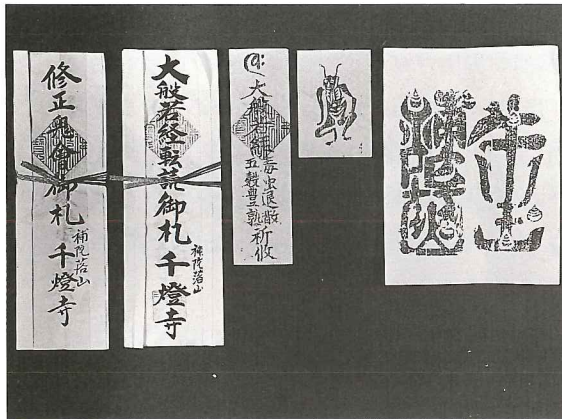




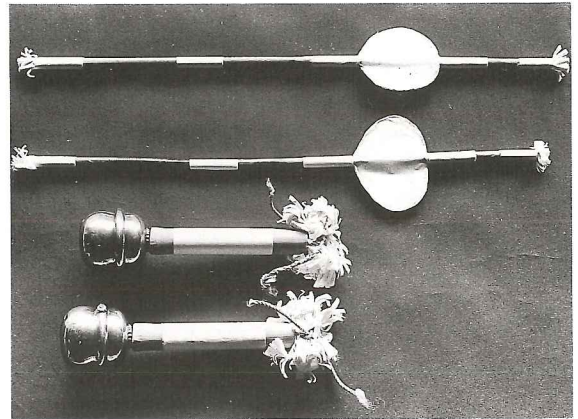
第62図 鬼会式「初夜導師」奥書



第63図 木槌・斧・午玉宝印



第64図 護符



第65図 団扇・鈴



第66図 護符版木 (右よりウ・イ・エ・オ・カ)



第67図 午玉宝印版木

第六章 応暦寺と無動寺およびその周辺の仏像

ここでは、本年度調査の対象となった六郷山寺院6ヶ寺のうち、大岩屋山応暦寺と小岩屋山無動寺の現存2ヶ寺の所在する真玉町大字大岩屋・同黒土地区に伝来する仏像について、各寺院の歴史的推移と関連させながら検討してみたい。

(1) 応暦寺とその周辺の仏像

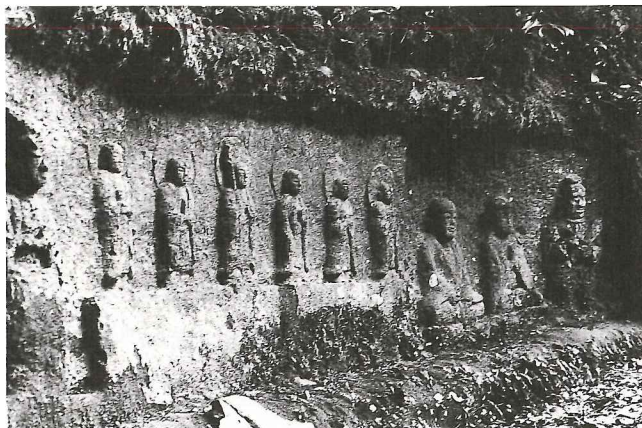
大岩屋山応暦寺がいつ頃成立したかについては不明であるが、記録の上では、長承4年(1135)の「夷住僧行源解状案」(余瀨文書『大分県史料(25)』所収、以下長承4年の「解状案」と略称)に、他の六郷山中山本寺とともに「大岩屋住僧在二人 先達(大法師)」とあり、少なくともこれ以前の創立とわかる。これ以後、平安最末期から鎌倉時代にかけての様相はわからないが、安貞2年(1228)、六郷山諸寺院が鎌倉幕府から正式に関東祈禱所に認定され(安貞2年12月8日付「関東御教書」島原松平文庫蔵)るに先立って、幕府に提出された「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録」(『太宰管内志』所収、以下安貞2年の「目録」と略称)に六郷山中山分の一ヶ寺として、「一大岩屋、本尊千手観音深山、年中勤修正月会正月、一夏九旬安居勤観音講毎月、初後入堂読誦經典、六所権現於御宝前、二季祭五節等、今始御祈禱長日観音經卅三卷読之」とあり、鎌倉前期のこの時期には、千手観音を本尊として安置し、その観音像に関わる観音講や観音經の転読などの法会が盛んに行われていたことが知られる。

ところで、現在の応暦寺の本尊は不動明王像(第68図)にかわっているが、これは近代になっ



第68図 応暦寺不動明王像

て同寺の境外末堂の一つ不動堂から移されたものといわれ、応暦寺関係の唯一の平安仏である。権材による内割もない一木彫成像で、浅彫りの省略的な衣文など退行した形式も見られるが、頭上に大ぶりの莎髻(現在のものは後補)をいただき、髪を巻毛にせず、左目を半眼にし、口端に牙を上下出するなど、「大日経疏」など儀軌に説く不動明王の像容を忠実にあらず。大ぶりで切れ込みの深い目鼻立ちや量感に富んだ体部・両膝の肉取りなど造形的にも随所に古様をのこす。年代的には11世紀末から12世紀にかけて、少なくとも長承4年(1135)の「解状案」の作成された頃を下るものではない。『六郷山年代記』(長安寺蔵)によれば、この頃の六郷山は永久元年(1113)、天台別院無動寺末となり、保安元年(1120)、山領が延暦寺に寄進されるなど、叡山との関係強化がはかられた時期であり、叡山文化の強



第69図 堂ノ迫磨崖仏

い影響のもと、造仏が盛んに行われたことが想像される。ちなみに、本像が旧在した不動堂については、応曆寺のある大岩屋谷の入口に「不動堂跡」と呼ばれる場所があり、ここにあった堂舎から移したものである。

そのほか、応曆寺関係の仏像としては、いずれも江戸時代、元禄8年（1695）の澄慶和尚による中興以後に新たに安置されたとみられる阿弥陀如来像・千手観音像・地藏菩薩像がある。このうち、千手観音像は現本尊不動明王像が移されてくる以前の本来の本尊であったのではなかろうか。また『天明年中六郷山寺院明簿』（『太宰管内志』所収）に応曆寺末寺と記載される下城前の弥勒寺と有寺の多宝院にも、それぞれ江戸期の応曆寺中興時に造立されたとみられる弥勒菩薩像と毘沙門天像が所在する。

単独の仏像ではないが、応曆寺に関わるものとして、同寺裏山の六所権現前の堂ノ迫に磨崖仏（第69図）がある。縦105cm、横525cmほどの横長の仏龕内を3区に分け、向かって左に六観音立像、中央には左端の閻魔王につづいて六地藏立像、右に夫婦とみられる僧形と女人の両坐像と司録の立像が各々半肉彫りされる。六道思想に基づいた図柄であるが、細部の刻出も緻密であり、南北朝後半期の造頭であろう。また、前記不動堂跡にも縦95cm、横260cmの仏龕があり、これには地藏石仏を中心に、左右に5体ずつの十王石仏を置く。地藏と十王のいくつかは頭部が後補であるが、十王各5体は一石から彫られ、そのずんぐりした体貌に的確な衣文を刻み出すあたり、永和4年（1378）銘の文殊仙寺十王像に通じる手法がみられ、やや下った室町前半期の造立とみられる。

（2）福真磨崖仏

下黒土の身濯神社から1kmほど上流にのぼった川の対岸に四王権現の鳥居があり、その奥の右側の岩壁に福真磨崖仏がある。縦130cm、横670cmほどの区画に、智拳印の大日如来を中心にした金剛界五仏を中央に、向かって右に六観音、左に六地藏が各々上下二段にわたって蓮華座に坐し、それらの両端には右に不動明王、左に毘沙門天の立像を置く。そして、これら尊像の区画外の右側には、陽刻・陰刻両様の梵字からなる法華種子曼荼羅が配される。尊像はいずれも半肉彫

りの小像であるが、その像容は服制から持ち物にいたるまで儀軌通りに表わされ、彫り口もシャープである。図像的には、金剛界五仏に六観音と六地藏を組み合わせるなど密教の理念と浄土教の六道思想の結合がみられ、また左右に脇侍として不動・毘沙門を配する点など、この図像が天台系のものであることを示している。一方、法華曼荼羅は、これまた天台宗の根本教典である法華経の見宝塔品にもとづいて、胎藏界曼荼羅の中台八葉院を中心にしたもので、尊像で表わした金剛界と対応させることによって、両者で金・胎両曼荼羅を構成するよう意図されている。こうした各種図像の組み合わせによる図様構成は、鎌倉時代に入ってからみられる形式であるが、各像の緻密で写実的なわりにやや萎縮した造形感覚は鎌倉期も後半から末期に下る造頭を思わせる。

この福真磨崖仏のある四王権現については、長承4年の「解状案」に、黒土岩屋・小岩屋・大岩屋と並んで「四王石屋住僧在 - 々々」とあるものに該当するとみられ、安貞2年(1228)の目録にも「一四王石屋、本尊四天王、仙室年中勤修云々(以下略)」と記され、少なくとも鎌倉前期頃までは本尊として四天王像を安置する有住の寺院として機能していたと考えられる。しかし、これ以後、後出の建武4年の「注文案」をはじめ、六郷山関係の記録に一切登場しないところを見ると、早くに廃絶したものであろう。

(3) 無動寺とその周辺の仏像

中黒土にある小岩屋山無動寺には、現在、本尊不動明王坐像をはじめ、薬師如来坐像・大日如来坐像・伝弥勒仏坐像のいずれも半丈六の大きさを誇る平安仏4軀が伝わり、往時はかなりの規模の伽藍あるいは末坊を擁していたことが推測される。しかし、前章までに指摘されているように、同寺の原所在地については、建武4年(1337)の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」(永弘文書『大分県史料三』)に示された四至などから、現在の下黒土小岩屋地区にある身濯神社祀りが想定され、現在の無動寺に所在する平安諸仏についても、その原所在を含めて慎重に検討する必要がある。



第70図 無動寺薬師如来像



第71図 無動寺大日如来像

- ・不動明王坐像 桧材一木造、像高 115.8 cm
- ・薬師如来坐像 樟材一木造、像高 155.0 cm
- ・大日如来坐像 樟材一木造、像高 178.0 cm
- ・伝弥勒仏坐像 樟材一木造、像高 125.0 cm

四像はいずれも一木造で、背中から大きく内割りをほどこすが、このうち薬師如来像（第70図）が最も古様を示し、大きめの螺髪に彫りの深い目鼻立ちには森厳な面持ちをたたえ、面奥も深い。胸腹部の肉取りも厚く、衣文の彫出は浅いが随所に鬚波式の名残りを見せる。11世紀後半期の造立であろう。次に大日如来像（第71図）と伝弥勒仏像（第72図）は、やや大きめの頭部にシャープさに欠けた類型的な面立ちを示し、体部の肉取りも平板で衣文の彫出も変化に乏しく形式的である。像容的には両者とも薬師像によく似るが、刀の冴え、彫刻としての充実度にはかなりの隔たりがある。おそらく、同じ六郷山仏師工房における12世紀も後半に下ってからの作例であろう。最後に、本尊不動明王像（第73図）は、左目を半眼にして口端に牙を上下出させ、忿怒相をあらわすが、その表情は穏やかである。ややいからせぎみの両肩から胸腹部にかけての造型や条帛等の形制に、前大日如来像に通じるものがあるが、その肉取りや衣文表現はより洗練されており、同像に先行する12世紀前半期の像立であろう。これら11世紀後半から12世紀にわたる平安諸仏も、以前は現無動寺から400 mほど西の無動寺の講堂跡と呼ばれる場所にあった小堂に保管されていたのが、その後同寺にあたる内迫御堂（現椿堂）に移され、昭和45年まで同所に安置されていたものである。そこで、これら諸仏の原所在として問題となるのが、本来の小岩屋山があった場所と推定される下黒土字小岩屋区にある身濯神社境内とその周辺である。

さて、この身濯神社は北側の岩壁を背にして、本殿・申殿・拝殿からなるが、本殿は岩壁を掘削した石窟内にはめこまれるように鎮座している。ところが、この石窟の岩肌には「奉岩屋切広、弘化二年巳二月吉日、十二神同さいしき□□、願主藤原藤三良」の陰刻銘があり、同石窟が弘化2年（1845）の掘削によること、ここに十二神将を安置する施設があったことがわかる。たしか

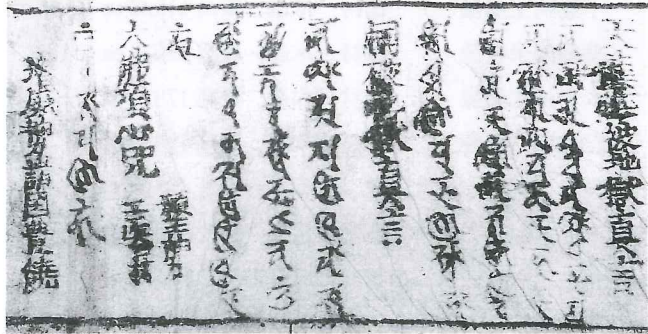


第72図 無動寺伝弥勒仏像



第73図 無動寺不動明王像

に、この石窟の前から申殿にかけての地面は、横幅11mほど方形に掘り下げてあり、間口5間ほどの建物が建っていたと考えられる。また、この石窟の外、岩壁の左右には室町前期頃のものと思われる磨崖宝塔11基が浮き彫りされ、前記十二神将のことも考え併せると、ここに少なくとも室町前期まではさかのぼって、何らかの仏堂があったと考えられる。



第74図 諸尊圖像陀羅尼經

そこで注目されるのが現無動寺安置の薬師如来坐像である。これには現在も眷属として十二神将像（鎌倉期の作とされるが、実際にはもう少し下るようである）が付随しており、この薬師・十二神将が本尊としてこの仏堂に安置されていたのではあるまいか。そしてこの薬師像は安貞2年（1228）の「目録」に「一小岩屋山、本尊薬師如来（中略）、月並勤薬師講^舞（中略）、薬師經十二卷、薬師行法一座」とある小岩屋山の本尊にあたり、この薬師像に関わる法会・行法が盛大に行われていたことが推察されるのである。

次に、この身濯神社境内の東側には、現在も「不動屋敷」と呼ばれる地字名が残っており、「中の坊の不動様を無動寺に移す途中、この場所で担いでいた棒が折れ、不動様はどうしてもここから動こうとしなかったのここに祀った」という伝承が伝わっている。ここにいう「中之坊」とは、無動寺の末坊十二坊の一つで（応暦寺蔵『応暦寺什器明細帳』）、現在もこの身濯神社の西側に遺称地があり、不動種子を薬研彫り（その書体から鎌倉末～南北朝頃と推定）した岩壁にさしかけた小堂がある。また、小堂の向かって左奥には、金剛界大日如来・如意輪観音・地藏菩薩を半肉彫りした中之坊磨崖仏（室町後期と推定）があり、その参道には五輪塔20数基が一群をなす。不動屋敷の伝承と考え併せると、現無動寺本尊の不動明王像が中の坊の旧仏であった可能性は高い。

残り的大日如来像と伝弥勒仏像の原所在については一切不明であるが、おそらくはこれらも旧小岩屋山周辺に散在した堂舎あるいは末坊に安置されていたものであろう。

ところで、現身濯神社の向かって右上の崖下には現在「観音堂」と称する小堂がある。ここには、以前木造の



第75図 宝泉坊毘沙門天像

観音菩薩像が安置されてあったといい、その胎内に納入されていたという陀羅尼一卷（第74図）が小岩屋区の個人宅に伝わっている。

。諸尊図像陀羅尼 一卷、版本

これはいわゆる「九重守」と称されるもので、密教諸尊の図像とそれらに関する梵文の陀羅尼・種子曼荼羅を幅8cmほどの卷子に列記したもので、その末尾に「増威神力諸国豊饒」の願文と「願主神力工匠□□」の願主名が記される。これに類するものとしては、弘安8年（1285）の奥書のある京都竜吟庵本（木造大明国師像納入品）、神奈川称名寺本（木造弥勒菩薩像納入品、鎌倉時代）があり、本陀羅尼巻もほぼその頃のものと考えられる。

さて、以上のような諸仏を擁した小岩屋山は、その末坊まで含めてかなりの規模の寺院であったことが推定されるが、最後に同寺の末坊の一つ「法（宝）泉坊」に関わる平安仏として、中黒土佐古地区所在の毘沙門天像を紹介しておきたい。

（4）宝泉坊の毘沙門天像

中黒土の佐古地区には、集落に隣接して「ホーセン坊」と呼ばれる場所があり、前記『応暦寺什器明細帳』にいう無動寺十二坊の一つ「法泉坊」に比定される。一方、同集落内には「清正公様」と呼ばれる小堂があり、いずれも江戸期の木彫仏・石仏に混じって、明らかに平安仏とみとめられる木造毘沙門天立像（第75図）が所在する。

。毘沙門天立像 榿材一木造、像高58.0cm

榿材の一木造からなる本像は、右腕を別材とするほかは頭・体共木から彫出され、内割りもない。両手先・足先および邪鬼が後補である以外は、当初の姿をよく残しており、その下半身に重心を置き、わずかに腰を捻ったゆるやかなプロポーション、浅彫りだが抑揚のある彫り口など、平安後期和様彫刻の定型を示している。おそらく、12世紀後半の六郷山仏師の作になるものであろう。

本像の原所在については不明であるが、この小堂境内には五輪塔をはじめ数基の中世石造物が散在し、あるいはこれらとともに宝泉坊から移されたものではあるまいか。

おわりに

国東地方の仏像、とくに六郷山諸寺院に伝来する多くの平安仏の場合、造像銘によって製作年代の知られるいくつかの遺例を除けば、いずれも平安後期ないし同末期という大まかな年代設定でしか捉えられないというのが実状である。というのも、国東の平安仏の場合、中央にあっては藤原様式の寄木造による和様彫刻の完成期にあたる平安後期にあっても、前代平安前期の一木造の伝統技法を墨守しながら、多方作風の上では温和な和様を見せる部分もあるといった、新・旧交錯した独特な様相を示しているからである。しかし、仏像の造立が、それが安置される寺院の創立、あるいは寺院の何らかの画期においてなされるという前提に立てば、これまで漠然と年代設定がなされていた国東地方の平安仏も、各寺院の歴史事象をより細かに検討すること — もちろん、その場合も様式史的検討が大前提となることは言うまでもないが — によって、より精度の高い年代設定が可能になると考えられるのである。

第七章 六郷山寺院の調査成果と課題

安貞2年(1228)の『六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録』には計33箇所の六郷山寺院の組織が「本山分」15箇所、「中山分」16箇所、「末山分」2箇所に分化されている。今年度の調査は六郷山寺院の本山分・中山分の内、本山分の豊後高田市の鞍懸石屋(鞍懸山神宮寺)、中山分の真玉町の黒土石屋(黒土山本松房)・小岩屋山(小岩屋山無動寺)・大岩屋(大岩屋山應曆寺)、国見町の千燈岩屋(補陀落山千燈寺)、そして、弘安7年(1284)の中山分の横城山(横城山東光寺)の6箇寺を調査対象とした。その調査成果の詳細はすでに前述したとおりである。

ここでは今年度の考古学的調査の成果を箇条書きにして整理し、まとめに代える。

I. 鞍懸石屋(鞍懸山神宮寺)

- (1) 豊後高田市の奥畑には鞍懸山神宮寺があったという鞍懸山城跡があり、「城の谷」という谷の川で、鞍懸山城の姫が水を酌んだという伝説が残っているのみである。

II. 黒土石屋(黒土山本松房)

- (1) 本松坊跡といわれる所には、巨大な手水鉢(石風呂か)が横立し、近くに「古宮」という畑もある。上黒土の身濯神社(六所権現)が、かつて祀られていた所という。
- (2) 本松房(坊)の南東側には「寺川内」や「寺屋敷」とよばれる所がある。
- (3) 建武4年(1337)の四至に「限南小岩屋堺」とある。この地点は小岩屋山の四至の「限北大石」に相当する。「大石」は、現無動寺より400mも下流であり、現無動寺は本松坊の四至内にある。
- (4) 『六郷山定額院主目録』に「小岩屋山無動寺、院主本松院」とある。
- (5) 無動寺の観音堂と本松房(坊)の本尊は共に馬頭観音であり、共通性がある。
- (6) 黒土山本松房(坊)跡には「本松堂」と呼ばれているお堂が建っている。お堂の傍の墓地には無動寺僧と同名の圓空大徳などの墓碑がある。
- (7) 安貞2年(1228)の目録の黒土石屋が黒土山本松房(坊)であれば、その周辺には岩陰や洞窟などの石屋がなければならない。
- (8) 上記した(3)~(7)により、本松房(坊)は石屋のある現無動寺から当地に移った可能性がある。

III. 小岩屋山(小岩屋山無動寺)

- (1) 中黒土にある現小岩屋山無動寺は下黒土の見濯神社とその周辺から移ったという伝承がある。これを傍証する資料として次の様なものがある。
 - ① 小岩屋という通称名は、下黒土の身濯神社とその周辺部が中心である。現無動寺は中黒土に位置している。
 - ② 建武4年(1337)の四至に「限北大石」とある。「大石」は、現無動寺より400mも下流にあり、現無動寺は四至の外、つまり、本松房(坊)の四至内に位置する。
 - ③ 現無動寺の身濯神社(六所権現)は下黒土の身濯神社(六所権現)から分社されたと

いう伝承がある。

- ④ 現無動寺の本尊は不動明王であるが、不動明王は下黒土の中ノ坊から小岩屋の不動屋敷を経て移されたものという。
- (2) 現無動寺には元禄8年(1695)の中興開基一世の圓舜大和尚の墓碑があり、これが最も古い。現無動寺が中黒土に中興されたのは17世紀中～後半頃であろうか。
- (3) 講堂跡は、現無動寺より約400m西側の通称「大石」にある。建武4年(1337)の四至に「限北大石」とあり、講堂はこれ以降の時期の所産である。
- (4) 下黒土の見濯神社には鎌倉時代～南北朝期の磨崖種子1と磨崖宝塔11が刻まれている。風雨による浸食が著しく痕跡を留める程度のももある。
- (5) 下黒土の身濯神社の神殿は、洞窟内に鎮座しており、入り口の岩肌には、弘化2年(1845)に岩屋を掘広げ、「十二神同さいしき」を施行したと刻まれている。現在、身濯神社(六所権現)であるが、弘化二年には十二神将を祀っていたことが判る。
- (6) 神殿と拝殿の間の岩盤の、やや高い西と東の隅を「L」の字状に削って、講堂の様な建物を配置した跡を示す加工がある。
- (7) 下黒土の身濯神社の山王権現のやや上手に、平坦な狭い空間がある。ここは薬師堂か六所権現社が祀られるに最も相応しい場所である。無動寺の本尊が元々薬師如来であることから推測して、岩屋には十二神将が安置され、この平坦面には六所権現社が祀られていた可能性が高い。
- (8) 下黒土の身濯神社の周辺には、「中ノ坊」や「不動屋敷」があり、真玉川を渡った影平地区に坊屋敷の「ボヤシキ」をはじめ、「慈連坊、地連坊」である「ジレンボウ」跡が確認できた。
- (9) 無動寺の「寶泉坊」は、中黒土の佐古地区の「フーセンボウ・ホーセンボウ」と呼ばれている所が相当する。佐古地区には清正公様というお堂があり、平安時代の終わり頃の木造毘沙門天像が安置されている。このお堂を仏仙坊、法泉坊とする説もある。
- (10) 建武4年(1337)の無動寺の四至は「限東美尾 限西堂山美尾 限南西拂 限北大石」とある。「美尾」は山や坂などの裾の長くのびた所をさす。下黒土の中ノ坊から身濯神社の北側の山を「ドヤマ」と呼んでいる。これは「堂山美尾」に相当する。「西拂」は唐溪山弥勒寺の周辺の小字名である。「大石」は現無動寺より400m下流にある巨岩周辺を「オオイシ」と呼んでいる。無動寺の四至が明確に比定できたが、四至の北の方角は、実際には略東を指していることが判る。

IV. 大岩屋(大岩屋山應曆寺)

- (1) 應曆寺に関する遺構としては、本堂・庫裡・観音堂、墓地群、講堂跡、六所権現、堂の迫磨崖仏、山王社、奥ノ院の姥ヶ懐を図示し、妙見ノ岩屋、十一面観音ノ岩屋、不動堂をはじめ、末寺の有寺の多宝院と西払の弥勒寺を確認した。
- (2) 『太宰管内志』によると、應曆寺は3町ほど南にあり、現在地に寺を中興したのは、両

子寺の順慶法印の弟子の登慶（澄慶）であるという。しかし、奥ノ院である姥ヶ懐や室町期の堂ノ迫磨崖仏などは動きようがないのであり、本堂や庫裡が現在地に移動した程度であろう。

- (3) 本堂・庫裡の裏側や参道の左右には墓地群があるが、近世～現代の墓地である。最古のもので、貞享元年（1684）の「彌真道教為菩提」があり、当地に中興した「文政五年 現住順盛再建 元禄8年（1695）乙亥年 中興法印澄慶墓」がある。
- (4) 安貞2年（1228）の『目録』に「六所権現」とある後は、元禄14年（1701）、安永5年（1776）、天明年中（1781～1788）の各文献にも「鎮守四所権現ノ岩屋」とあり、六所権現から四所権現に変わっている。しかし、文政2年（1819）には「六所大権現」の鳥居があり、再び六所権現として祀られている。六所権現は奥ノ院の岩屋に祀られていたものを、大正時代の初めにこの地に遷座したものである。
- (5) 六所権現の隣接地に講堂跡の礎石が遺存している。講堂の礎石は径約60～100 cmの自然礫であり、5間・4間に並べている。
- (6) 現六所権現の横の参道を登ると、右側斜面部に県指定の堂の迫磨崖仏がある。室町時代の作といわれ、六観音や六地藏などが刻まれている。
- (7) 参道の階段を登ると、右側に樹齢約450年という杉の御神木があり、左側には人為的な平坦面がある。この一帯はタケン堂と呼ばれている。享保2年（1717）に焼失したという嶽の権現社が祀られていたという跡であろう。この参道には、現在の観音堂にある石造仁王が建っていたという。
- (8) 人為的平坦面の西隅斜面部に「山王七社大権現」の石祠がある。祠の奥壁の内側には種子曼陀羅が刻まれている。
- (9) 最奥部の右側に奥ノ院の姥ヶ懐がある。六郷満山の峰入行場の一つで、行者がここで帯を解き、汗をぬぐって美食することを許される場所という。

V. 千燈岩屋（補陀落山千燈寺）

- (1) 補陀落山千燈寺には他の六郷山寺院に比較して仁聞菩薩に関する伝承が多く、仁聞入寂の地とも言われている。
- (2) 実測した範囲は西ノ坊、護摩堂（本堂）、玄関・庫裏・長屋、山王堂、講堂、地主権現、本堂（奥ノ院）、仁聞菩薩御廟、六社権現堂、弘法堂、五輪塔群などがある約200 mである。
- (3) 石段の参道を登り詰めると、奥ノ院本堂である。洞窟の奥壁に沿って4～5段の壇を設け、近世～近代の観音像を多数安置している。一方、堂に向かって洞窟の左岩壁には、来迎磨崖仏が陽刻されている。一部に朱彩色が残り、鎌倉時代の製作という。
- (4) 六所権現には、県指定の宝塔が安置されていた。宝塔には納入孔があり、經典などを奉納したと見做される。安貞2年（1228）の目録には人間自筆の如法経を奉納したという「瀧本ノ岩屋」があり、中野幡能氏は六所権現の岩屋に比定している。

- (5) 仁聞菩薩御廟といわれる仁聞入寂の岩屋は、安貞2年(1228)の目録にある「枕石屋」に相当する。この岩屋の左側の岩陰には銚子を彷彿とさせる五輪塔があり、「銚子岩屋」とはこの岩陰をさすのであろうか。
- (6) 千燈寺の西の高野とよばれる千燈寺墓地には五輪塔群が二箇所にある。最初の五輪塔群は弘法堂、仁聞の墓を中心とした約140基前後であり、奥の五輪塔群は約900基前後である。総数1,000基強である。
- (7) 『豊後國志』や『豊後史蹟考』(1905年)には「僧仁聞墓」の発見記録が記載されている。文面を検討すると銅経筒の発見の有り様ともとれそうである。千燈寺墓地石塔群の「仁聞の墓」という位置が千燈寺経塚であった可能性は記載内容からかなり高いといえる。

VI. 横城山(横城山東光寺)

- (1) 現在の本堂は小さな平屋の建物であるが、明治23年(1890)の『寺院明細牒』には本堂庫裡(竪五間四尺、横拾壹間三尺)とある。古老によると、大正時代の初めまで本堂と薬師堂で交互に鬼会が行われていたという。本堂西下の小道を約80m程度下った位置に小さな清水の溜まり場がある。鬼会のコーリトリの場所であろう。
- (2) 本堂の南方15mの位置には護摩堂があったと言われている。現在は道路に削平されて、その痕跡も確認できない。
- (3) 本堂・庫裡の東南部には観音坂という古道の一部があり、その一角には観音屋敷と呼ばれている狭い平坦地がある。当屋敷の屋号はカンノサカと呼ばれている。
- (4) 本堂・庫裡の西側には古い小道が縦に走っており、竹藪や雑木が生い茂る階段状の平坦面がある。この付近は「堂の前」と呼ばれている。最奥部の丘陵部には薬師堂があった。『寺院明細牒』には薬師堂(竪二間一尺、横二間一尺)が記載されている。
- (5) 薬師堂の上手、横城山から派生する丘陵の鞍部には経筒が埋納された経塚群がある。現在、経塚の石室は10基、経筒は表面採集を含めて13点分が出土している。東光寺の奥ノ院とその周辺部に相当する位置である。
- (6) 横城の丘陵部には、楠木屋敷(古屋敷)という狭い平坦面がある。寺は、ここから、現在の所へ移ったという。本堂の移転か、院主坊から庫裡へ移ったかは判らない。
- (7) 楠木屋敷(古屋敷)の近くには當山中興の了俊大和尚の享保19年(1729)の墓碑を中心とした近世墓がある。最古は元禄9年(1696)の墓碑である。
- (8) 楠木屋敷(古屋敷)よりやや下った位置には産部屋を作ったという狭い空間がある。豊後高田市の長安寺の不浄道・産小屋、智恩寺に次ぐ事例である。
- (9) 横城山腹には日吉社がある。安永5年(1776)、天明年中(1781~1788)の文献に「安岐郷横城東光寺・・・六所権現」となっているが、寛政3年(1791)の鳥居には「日吉社」とある。また、明治7年の『神社書上帳』には「一権現社日吉社ト改称願 祭神 従前不詳 大山咋命ト改称願」とある。

大分県立宇佐風土記の丘
歴史民俗資料館報告書第13集

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ

平成6年3月31日

発行 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
〒872-01 宇佐市大字高森字京塚
TEL 0978 (37) 2100

印刷 松原印刷
宇佐市大字長洲548の1
